坂崎ニーナ眞由美

Memories of Michael Jackson

Mayumi Nina Sakazaki

ポプラ社

題字
カバーイラスト／坂崎ニーナ眞由美

Michael's History

Memories of Michael Jackson

Mayumi Miura Sakazuki

Michael's History

年	月	出来事
1958年	8月	インディアナ州ゲーリーにて、父・ジョセフ（ジョー）、母・キャサリンの7番目の子として誕生
		兄弟で構成する音楽グループ「ジャクソン5」、シングル「Big Boy」でインディーズデビュー
68年	1月	ジャクソン5、モータウン・レコードと契約
69年	10月	ジャクソン5、「I Want You Back」でメジャーデビュー
71年	10月	シングル「Got To Be There」でソロデビュー
75年		ジャクソン5、エピック・レコーズへ移籍し、グループ名を「ザ・ジャクソンズ」に変更
78年	10月	ダイアナ・ロスと共演した映画「THE WIZ」公開
79年	8月	ソロでのファーストアルバム「Off the Wall」発売
79年		ビル・ブレイ、マイケル専属のセキュリティスタッフになる
82年	6月	映画「E.T.」のストーリーブック・アルバムに、ナレーションで参加
	10月	ポール・マッカートニーとのデュエット曲「The Girl Is Mine」を、片面シングルとして発売
	12月	アルバム「Thriller」発売。全世界で1億枚以上売れ、歴史上もっとも多くの売上げを記録 エンシノの家を改築
83年	5月	モータウン25周年コンサートで、ムーンウォークを初披露
84年	2月	グラミー賞で8部門を受賞。ジャクソンズを脱退
86年	7月	**「マイケルズ・ペッツ」プロジェクトに関し、ニーナ・M・坂崎とミーティングを行う**
87年	8月	アルバム「BAD」発売
	9月	ソロとして初のワールドツアー開始。最初の公演を日本（後楽園球場ほか）で行う。 **ウェルカムパーティー開催される** **東京ディズニーランドやゲームメーカー「セガ」本社などを訪問** **高谷敏雄さんたち、専属シェフに**
	10月	**来日ツアー中に身体の不調を訴え、Y医師の診察を受ける**
	12月	**銀座山崎、「ゴールド・マイケル・コインメダル」発売**
88年	5月	サンタ・バーバラのシカモア・バレー牧場へ引越し、そこを「ネバーランド」と命名
	12月	「BAD」ツアーで来日（東京ドームで公演） スタッフ約200名に、ソニーのハンディカムをプレゼント
90年	8月	**セガ、ゲームソフト「ムーンウォーカー」発売**
91年	3月	ソニー・ソフトウェア社と高額で契約
	11月	アルバム「DANGEROUS」発売
92年	2月	「Heal The World 基金」を設立し、ツアーの収益を全額寄付
	12月	「DANGEROUS」ツアーで来日（東京ドームで公演） **横浜ジョイポリスや長崎のハウステンボスを訪問**
93年	2月	**セガのアーケードゲーム「AS-1」用の映像を撮影**
	8月	少年への性的虐待疑惑が浮上
	9月	「DANGEROUS」ツアーで来日（福岡ドームで公演） **ハウステンボスを訪問**
93年		**セガのゲーム音楽を制作**
94年	5月	リサ・マリー・プレスリー（エルビス・プレスリーの娘）と結婚
95年	6月	アルバム「HIStory」発売
96年	1月	リサ・マリーと離婚
	3月	サウジアラビアのアル・ワリード・ビン・タラール王子とジョイントベンチャー事業を行うと発表
	11月	デビー・ロウと再婚
	12月	「HIStory」ツアーで来日（東京ドーム、福岡ドームで公演）
97年	2月	長男・プリンス誕生
	5月	短編映画「GHOSTS」、第50回カンヌ映画祭で上映
98年	4月	長女・パリス誕生
99年	10月	デビーと離婚
2001年	11月	アルバム「INVINCIBLE」発売
02年		**セガ、マイケル出演のゲームソフト「スペースチャンネル5 パート2」発売** 代理出産により、次男・プリンス＝マイケル2世誕生
03年	11月	少年への性的虐待疑惑で提訴される
05年	6月	無罪判決が下る。その後バーレーンに移住
06年	11月	ビル・ブレイ逝去
09年	3月	同年7月から、ロンドンで、生涯最後の公演「THIS IS IT」を行うと発表
	6月	ロサンゼルスにて逝去
	7月	ロサンゼルスにて公開追悼式が行われる
	10月	映画「THIS IS IT」公開

※太字は著者が関わった出来事です

エンシノにて撮影
手に持っているのはタランチュラ

Memories of Michael Jackson

エンシノにて撮影
マイケルのペットのタランチュラ

エンシノにて撮影
バブルスと一緒に

Memories of Michael Jackson

ビル・ブレイのアルバムから
コンサート記念写真

エンシノにて撮影
家のテラスで

キャピトル東急ホテルにて撮影
1987年「BAD」ツアーで来日

Memories of Michael Jackson

ニューヨークのホテルにて撮影
コインメダルの承諾

Memories of Michael Jackson

エンシノにて撮影
バブルスと一緒に

Memories of Michael Jackson

お台場の「東京ジョイポリス」にて撮影
来場記念にサイン

東京ジョイポリスにて撮影
ゲームに挑戦

東京ジョイポリスにて撮影
レーシングゲームにチャレンジ

Memories of Michael Jackson

東京ディズニーランドにて撮影
メリーゴーラウンドに乗るマイケル

Memories of Michael Jackson

「DANGEROUS」ツアーのVIPパス

銀座山崎（現・ギンザタナカ）
メダル記念テレフォンカード

Memories of Michael Jackson

©SEGA

セガ本社にて撮影
ビル・ブレイと新しいゲームに挑戦

ビル・ブレイのアルバムから
ビルとビジネスマネジャーのフランク・ディレオ氏とマイケル

エンシノにて撮影
初めてバブルスを抱っこして

Memories of Michael Jackson

キャピトル東急ホテルにて撮影
夫のジャックとマイケル、ビルと一緒に

Memories

of

Michael Jackson

マイケル・ジャクソンの思い出

坂崎ニーナ眞由美

Memories of Michael Jackson

Mayumi Nina Sakazaki

ポプラ社

はじめに

２００９年6月25日、「マイケル・ジャクソンが亡くなった」とのニュースが、世界中をかけめぐりました。

ロンドン公演「THIS IS IT」をわずか2週間後に控えての思いがけない訃報に、マイケルを知る人や数多くのファンたちは哀しみに沈みました。しかし皮肉なことに、彼の死後、空前のマイケル・ブームが起こったのです。

＊　＊　＊

映画「THIS IS IT」が、日本でも大ヒットしていた昨秋。出版関係に携わっている20年来の友人が、「マイケルについて本を書かないか」と私を訪ねてきました。

私は、生まれは日本ですが、12歳からアメリカで育ち、日系アメリカ人の夫と結婚しました。その後、スポーツマーケティングを行う夫の会社を手伝うようになり、現在は海外のマスコットキャラクターなどのインターナショナルライセンス事業を行っ

ています。

音楽業界とはほとんど関わりなく生きてきた私ですが、あるトラブルがきっかけで、1986年から10年間、マイケル・ジャクソンのいくつかのライセンスプログラムの日本での代理人を務めることになりました。さらに、マイケルが父親のように慕っていたビル・ブレイという男性から、マイケルが公演等で来日した際の、プライベートな時間のアレンジを頼まれたのです。

そこで私は、世紀の大スターの素顔——純粋さや仕事への真剣さ、そして苦悩——を、間近で目撃することになったのでした。

しかし、マイケルと交流があったのは、10年以上も前のことです。マイケルとの会話を記録したメモや、仕事上での資料は残っているものの、私はどこまで思い出せるか自信がありませんでした。すると彼女は、「マイケルが日本で関わった人たちに会ってみたらいいじゃない?」と提案し、励ましてくれました。

こうして私は、マイケルを通して知り合った人たちと、久しぶりの再会を楽しむこ

とになり――。彼らとの会話によって、マイケルに関する記憶が、少しずつよみがえってきたのでした。

私がこの本を書くことにした理由は、二つあります。

一つは、この機会に、信じがたいほどの稀有な人物と仕事をするチャンスをくれたビル・ブレイに、そして私にさまざまなことを教えてくれたマイケル・ジャクソンに、感謝をしたいと思ったからです。

そして二つ目の理由は、ステージから離れた素のマイケルについて、書きたかったからです。

彼は礼儀正しく誠実で、思慮深く、物静かで控えめな半面、人を面白がらせることが大好きで、好奇心が旺盛、そして勤勉な人でした。

マイケルについては、すでに数多くの書籍があります。彼の経歴などは、ファンのみなさんのほうが、私よりもよくご存知かもしれません。

ですからこの本では、マイケルが私に教えてくれた大切なこと、マイケルが私や、

彼に出会った人々の人生にどんなふうに影響を与えたかを、書いてみたいと思います。そして、これは何よりも重要なことですが、この本を読んでくださっているみなさん、そしてマイケルを愛してくださったみなさんに、マイケルにとってあなた方がどんなに大切であったかを、お伝えしたいと思っています。彼は、ファンのみなさんに囲まれて、たくさんの愛を感じていました。

かつて、滞在中のホテルでいつもそうしていたように、きっと彼は今も天国で、何度も何度も席を立っては窓際に行き、下を覗き込んでは、ファンのみなさんに手を振って言っていることでしょう。

「テイク・ケア！（身体をいたわって）」

２０１０年５月

坂崎　ニーナ　眞由美

1 1986年、マイケルとの出会い
1986, Meeting Michael

マイケルと「キャピトル東急」

＊　＊　＊

2 マイケルが愛した日本人たち

The Japanese whom Michael cherished

マイケルと「セガ」

＊　＊　＊

ネバーランドを訪れる

＊　＊　＊

スーパースターの葛藤

＊　＊　＊

親子のようだったマイケルとビル・ブレイ

＊　＊　＊

僕はファンに
ハッピーになって
もらいたいんだ

I want to make
my fans "Happy"!

1

1986年、マイケルとの出会い

1986, Meeting Michael

「マイケルズ・ペッツ」をめぐる騒動

＊　＊　＊

「マイケルズ・ペッツ」プロジェクト

私がマイケル・ジャクソンと初めて会ったのは、１９８６年。
マイケルが当時飼っていた動物や、想像で作りだした動物をキャラクター化するという、「マイケルズ・ペッツ」のライセンス事業に携わることになったのが、すべての始まりでした。

１９８５年、アメリカの大手玩具メーカーの重役だったボブ・マイケルソンは、マイケルがチンパンジーのバブルスをテキサスの癌研究クリニックの動物実験から救い出したことをニュースで知りました。

１９８２年に発売されたアルバム「Thriller」の記録的なヒットを受け、すでにそ

の頃、マイケルは世界的なスターとなっていました。マイケルの人気を背景に、バブルスをはじめとしたペットたちをキャラクター化して売り出せば、マイケルのファンだけでなく、子どもたちにも受けるに違いない。そう考えたボブは、マイケルのマネージャー、フランク・ディレオを通じて、マイケルに接触を図りました。

「マイケルズ・ペッツをキャラクター化し、ゆくゆくは子どもたちのための絵本やアニメーションを作りたい」というボブの提案に、マイケルは快く賛成しました。

これを受けてボブは、独立してマイケルズ・ペッツ社を立ち上げ、商品開発と製造を開始しました。

ボブと、私の夫であるジャック坂崎が知り合ったのは、１９８６年1月、ニューヨークで開かれた玩具ショーの会場でした。ジャックはスポーツマーケティングや、それにまつわるライセンス事業を行っており、玩具メーカーとのコラボレーションも多いため、玩具ショーにはよく行っていたのです。

その年の春、日本でのマイケルズ・ペッツの販売代理店を探していたボブが、ジャックを頼って来日。当時、ジャックが経営する会社のライセンス部門を担当していた

私も、ボブとのミーティングに参加することになりました。
その席上、ジャックはボブに「マイケル自身が日本での販売を積極的に応援してくれないかぎり、成功は望めない」「契約を結ぶ前に、マイケルにその意思があるか、直接本人に確かめたい」と言いました。マイケルが動物愛好家で、自宅でキリンや大蛇（ボア）、チンパンジーなどを飼っていることは、日本ではあまり知られていませんでした。マイケルズ・ペッツを日本でヒットさせるには、発売のタイミングをニューアルバムの発売や来日公演に合わせ、マイケル自身にプロモーションをしてもらうことが必要不可欠だと考えたからです。
それに対し、ボブは「マイケルは、このプロジェクトに深く関わっているから大丈夫だ」と答え、マイケルと会う手はずを整えてくれました。そこで1986年7月、ジャックがロサンゼルスへ飛ぶことになり、私も彼に同行したのです。
ちなみにこの頃、私は特にマイケルのファンだったわけでも、音楽に詳しかったわけでもありませんでした。友人に「今度、マイケルと仕事をするの」と話すと、「えー！すごいわね。マイケル・ジョーダンと仕事するの？」と言われたものです。

マイケルの「親代わり」、ビル・ブレイとの出会い

ロサンゼルスに着いた私たちは、ビバリーヒルズのビバリーウィルシャーホテルのプールサイドで、ボブ・マイケルソンから、マイケルのビジネス部門のマネージャー、フランク・ディレオと、セキュリティのチーフ、ビル・ブレイを紹介されました。ボブによると、ビルは「マイケルが一番信頼している人物」であり、「マイケルの目をこの事業に向けるには、ビルと連絡を取り合うことが重要だ」とのことでした。

元はロサンゼルス市警の警察官だったというビルは、背が高くがっしりとした体格でしたが、とてもフレンドリーでした。笑顔には温かみがあり、握手した手からも力強さと優しさが感じられました。また、ビルは第二次世界大戦後、進駐軍として日本に滞在していたことがあるらしく、日本に対して親しみを抱いているようでした。

その後私たちは、当時ウィルシャー大通りにあったビルのオフィスを経由してマイケルズ・ペッツのキャラクター開発を請け負っているプロダクション「セップ・インターナショナル」に連れていかれ、マイケルズ・ペッツについての詳細な説明を受けました。

まず、キャラクターは以下の通り。

チンパンジーのバブルス
熊のクール・ベア
ラマのルイ
ダチョウのジニーン
大蛇のマッスル
キリンのジャバー
ウサギのスージー
カエルのアンクル・トーキー
犬のスパンキー
ブルドッグのミスター・ビル

それぞれ、個性豊かです。
バブルスはチャーミングだけど、いたずらっこ。クール・ベアはかっこいいけれど、

マイケルズ・ペッツのキャラクターたち

マイケルズ・ペッツのぬいぐるみ
ミスター・ビル

怖がり。ルイは予知能力があるけれど、なまけ者。ジニーンは優しいけれど、おしゃべり。マッスルは強いけれど、話すことがとげとげしい、といった具合に。

なお、物忘れの多い探偵、ミスター・ビルは、ブルドッグそっくりなビル・ブレイをモデルにした、とのことでした。恥ずかしがりやでスポーツマンで、歌が歌えて人々をハッピーにする力があるスパンキーは、もしかしたら、マイケルがモデルだったのかもしれません。

アニメーション化についても、かなり具体的な構想ができあがっているようでした。舞台は、どこかニューヨークを思わせる、都会の街。テレビの30分番組を想定しており、毎回、迷子になった動物を探しに行くなどのストーリーを軸に、けんかもするけれど、何かあると助け合って問題を解決するペットたちの姿を描いていくというものでした。

絵コンテなどを見せられながら、こうした説明を受け、私たちはマイケルはかなり、このプロジェクトに入れ込んでいるようだと感じました。

タランチュラのテスト

セップ・インターナショナルでのミーティングの後、私たちはいよいよ、マイケルと会うことになりました。
ビバリーヒルズから、北に車で30分の所にあるエンシノの町。そこに、マイケルが家族と住む家がありました。

大きな鉄の門は、ビル・ブレイの指示でゆっくりと開きました。
車から降りた私たちは、ガレージ近くにある「エンタテイメントルーム」に案内されました。50坪ほどの部屋には、小さな子ども用のメリーゴーラウンドや可愛いらしい乗り物、ピンボールマシンなど、さまざまな遊具が用意され、ポップコーンやキャンディなど、好きなお菓子がリクエストできるカウンターもありました。私たちが子どもだったら、興奮したはずです。庭の植木は動物の形に刈り込まれ、遠くの檻(おり)ではキリンがのんびりと歩いていました。
マイケルはこれらの設備を、病気の子どもたちや施設の子どもたちを招待し、楽し

ませるために作ったそうです。しかしビルによると「マイケルは、よく動物をプレゼントされるのでどんどん増え、近所から臭いがひどいと苦情が殺到している。そのため、引っ越しを考えている」とのことでした。

母屋に通された私たちは、大理石の広い玄関を抜け、プラチナレコードや、音楽で受賞した盾やトロフィーが飾られている「アワードルーム」に案内されました。見るものすべてが珍しく、きょろきょろすること数分。ついにマイケルが「ハーイ」と手を振りながら入ってきました。赤いシャツに黒いスラックス、白いソックス、黒い靴といったいでたちです。

初めて会ったマイケルに、私は惹きつけられました。今までに見たことがないような、澄んだ瞳と美しい笑顔。何よりも彼にはオーラがあり、生身の人間であることを忘れてしまうような、不思議な存在感がありました。

彼は、まるで雲の上を歩く仙人のように、軽やかに、音を立てずに歩いてきました。

私たちはまず、軽く握手を交わしました。とても優しく、繊細な手でした。その後、自己紹介をしたのですが、「マユミ」という私の名前を面白がって、マイケルが自分

と私とを交互に指差しながら「マイ（My） ユー（You） ミー（Me）」と言っていたのを、今でもよく覚えています。

その後、マイケルは私たちに「悪いけど、朝食を食べながらお話を聞いてもいいですか？」と尋ねました。「いいですよ」と答えると、シェフがコーヒーテーブルにトレイを置いて出ていきました。その日のマイケルの朝食は、ミルクをかけたシリアルとオレンジジュースだけ。マイケルはそれを食べながら、動物キャラクターのイラストをチェックし、私たちは彼に、日本でのプロモーション用の写真を依頼したり、ニューアルバムのレコーディング状況やリリースのタイミングを尋ねたりしました。

マイケルは、動物をキャラクター化した理由について、

「人間は肌の色が違い、それによってある程度決まったイメージを持たれてしまう。その点、動物なら、自由にキャラクターの設定ができるでしょう」

「動物は意地悪をしないし、必要以上にものを食べないし、自然との調和がとれている。地球に優しい存在だと思う」

「この事業を通して、子どもたちみんなに、動物に優しくなってほしいんだ」

と話していました。

マイケルは、動物たちと自然に接することができるという、天賦の才能の持ち主でした。ビル・ブレイから聞いたのですが、マイケルが手のひらに餌をのせて外に立っていると、野生の鳥たちが寄ってきて、その餌を食べていたそうです。

また、マイケルは大蛇のマッスルをプールで泳がせていました。それどころか、マッスルはマイケルの部屋の浴槽の中で眠ることもあったそうです。

さらにマイケルは、マイケルズ・ペッツの今後の事業展開についても、

「僕はこれを、ぬいぐるみとして販売するだけでなく、絵本やアニメーションにしていきたい」

「僕のペットたちは、顔もキャラクターもバラバラ。でも、相手のいいところや悪いところをちゃんと見極めて、仲良くやっていく姿を描きたいんだ」

「アニメーションのストーリーは、子どもたちが普段直面しているトピックスを中心にしたい。でも時々は宇宙に関する話とか、ファンタジックなものも入れたい」

と語ってくれました。

マイケルの声はとても小さく優しい口調でしたが、その目はじっと私たちの顔を見つめて、真剣そのものでした。

やがて食事を終えたマイケルは、胸のポケットに手を入れ、黒くもじゃもじゃしたものを取り出しました。それが何なのかを察知したボブとビルは、椅子から飛び上がり、急いで部屋の外へ逃げようとしたのですが、身体が力士のように大きいうえ、膝が悪いボブは、思うように動けません。その様子を見ながら、マイケルは「ボブが俊敏に動くのを初めて見た」とゲラゲラ笑い出しました。

私たちは事態が飲み込めず、しばらくあっけにとられていました。するとマイケルは私に近づき、手に持った黒いものを見せました。何とそれは、巨大なタランチュラ（毒ぐも）だったのです！

「これは僕のペットなんだ。あなたにつけてあげましょうか？」と尋ねられ、私はよくわからないままにうなずきました。昔住んでいたサクラメントの町で、カーニバルの時に、鳥やトカゲを肩にのせている人を見たことがあります。マイケルのタランチュラも、きっとそれに近いものだろうと考えたのです。

マイケルは、私の上着の襟の上に、タランチュラをそっとのせました。私が「毒は抜いてあるんでしょう?」と訊くと、驚くべきことに、マイケルは「いいえ」と答えるのです! さらに彼は平然と「彼らは、自分の身が危ないと思ったら毒で攻撃してくるけど、何もしなければ大丈夫だよ」と言うのでした。

困惑する私をよそに、夫のジャックが記念写真を撮ってくれました。とっさに笑顔を作ったのですが、できあがった写真を見ると、やはり少し、表情がこわばっていました。しかし、あわてずにこやかに過ごしたので、「この人は、信頼できる」と思われたのでしょうか。続いてマイケルは、水色のカバーオールを着たバブルスを連れてきてくれました。抱いてみると、1歳半の子どもぐらいの重さで、人見知りすることもなく、とても可愛らしかったのを覚えています。

後で私はビルから、次のような話を聞きました。

インタビュー嫌いなマイケルですが、1982年秋、アルバム「Thriller」の宣伝のために、「ローリング・ストーン」誌の取材を受けることになりました。

当時、エンシノの家が改装中だったため、マイケルは家族とともに、サンフェルナ

エンシノにて撮影
マイケルからプレゼントされたタランチュラ

Memories of Michael Jackson

ンド・バレーに住んでいました。そこへ取材に訪れた女性記者、ジェリー・ハーシーが、玄関のベルを鳴らした時、マイケルはビルに「彼女を驚かせたい」と言ったそうです。

その仮の住まいには、大型動物は連れてこられなかったのですが、3メートルの大蛇が1匹いました。マイケルはジェリーに、蛇を持てるか尋ね、彼女はいやいやながら、マイケルの求めに応じました。ジェリーは、マイケルが「自分を、信頼できる相手かどうかを試している」と考えたそうです。

タランチュラの一件も、おそらくマイケルによる「信頼度テスト」だったのでしょう。

またビルは、「自分は、マイケルが小さい時から、よく遊び相手になっていた」と話してくれました。成長するにつれ、マイケルはビルにジョークを仕掛けるようになり、驚くビルを見ては喜んでいたそうです。「当時を振り返っては、二人でよく笑い転げるし、マイケルは今でも、常に何かいたずらを企んでいる。今日もすっかり罠に引っかかってしまった」と、言っていました。

けれども、タランチュラの件では、ビルは少し大袈裟に驚いてみせたように、私に

は思えました。

私たちが帰る時、当時マイケルと一緒に住んでいた妹のジャネットが、ビルに挨拶するために2階から降りてきました。快活なジャネットは愛らしい笑顔で、私たちを見送ってくれました。

また、庭で飼われているラマの近くを通り過ぎる時、マイケルは「近寄らないように気をつけて。彼はつばを吐くから」と教えてくれました。するとビルが私に、「マイケルは普段、そんな注意はしてくれないんだよ」と言いました。なんとマイケルは、ラマが客につばを吐くのを見るのが好きで、そのためにラマを飼っているのだそうです！　その日は私が、よそゆきのスーツを着ていたので、さすがのいたずらっ子も気を遣ってくれたのでしょう。

マイケルの家を訪れてから去るまで、およそ1時間。その間に起こったこれらの出来事は、私たちにとって一生忘れられないものとなりました。

マイケル来日！　ところが……

私たちがロサンゼルスから帰国する際、ボブ・マイケルソンは「マイケルのニューアルバムの発売とワールドツアーに間に合うよう、今、マイケルズ・ペッツのサンプルを作っているところだ」と言いました。

私たちとボブは、この事業の成功を祈りつつ、固い握手を交わして別れました。

日本に帰った私は、マイケルズ・ペッツ商品の販売元を探しました。

当時、アメリカの人気画家であり、絵本作家でもあるスチュワート・マスコウィッツの日本の代理人として、さまざまな商品の開発事業に携わっていた私は、いくつかの玩具メーカーとパイプがありました。間もなくマイケルズ・ペッツに関して、バンダイと独占販売契約を締結することになり、バンダイの担当者とともにマイケルと打ち合わせをするため、数カ月後に再び、ロサンゼルスへ飛びました。

そして、１９８７年９月。８月に発売されたニューアルバム「BAD」をひっさげ、マイケルが、ソロとして初のワールドツアーを開始しました。しかも、ツアー最初の

公演は、日本で行われることになったのです。
そこで私たちは、マイケルの来日に合わせてウェルカムパーティーを企画し、マイケルズ・ペッツの商品を紹介することにしました。「ぬいぐるみの生産が遅れ、ツアー開始までにすべてのラインナップが揃わない」という問題はあったものの、プロジェクトはおおむね順調に運んでいるように思えました。

ところが、思いもよらない事態が発生したのです。

ツアー開始を1週間後に控えた、ウェルカムパーティー当日。
私たちはキャピトル東急ホテルのバンケットルームで、この日のために集まったたくさんの記者やファンとともに、マイケルの到着を待っていました。
会場には、バンダイがアメリカのマイケルズ・ペッツ社から輸入したバブルスのぬいぐるみが所狭しと並べられ、インターナショナルスクールの生徒や、聖心女子学院の小学生たちもたくさんいました。ビルから「子どもたちを招待するのを忘れないで。マイケルは恥ずかしがりやだけど、彼らがそばにいると、すごく安心するから」とい

うリクエストがあったからです。また、ロサンゼルスで生まれ育った日系アメリカ人、ケニー・エンドウの太鼓の演奏や、私の友人たちによる日本の舞踊を見せる手はずも整っていました。

やがてマイケルが嬉しそうな表情で、会場に入ってきました。しかし彼は、バブルスのぬいぐるみを手に取るやいなや、顔を曇らせ、小声でこう言ったのです。

「バブルスの目が違う。これは僕が承認したものじゃない」

私たちは、顔色を失いました。確かに、サンプルとまったく同じではないことに気づいてはいましたが、「ぬいぐるみだから、少し違うこともあるだろう」と思っていたのです。しかしマイケルは、「目」をとても大事なものだと考えていました。そのぬいぐるみの出来映えを見て、彼は「ソウルが入っていない」「これではファンが喜んでくれない」と感じたのです。

マイケルズ・ペッツを日本でヒットさせるには、来日中のステージや記者会見などで、マイケル自身にプロモーションをしてもらう必要があります。しかし、彼がぬいぐるみの出来映えに満足していない以上、それを望むことはできません。すべての計画は、一瞬にして崩れ去ってしまったのです。

マイケルは、子どもたちと言葉を交わしたり、一緒に写真を撮ったり、パーティー自体は楽しんでくれたようでした。しかしマイケルズ・ペッツ事業の成功は、ほぼ絶望的となりました。

私はアメリカのマイケルズ・ペッツ社に電話を入れ、ボブに説明を求めました。

このようなケースでは、一般的には、まずサンプルを作り、それに対する許可を得てから、商品の製造に入ります。ところがマイケルから許可が出た後で、サンプルと同じ形の目を製造するのが難しいとわかり、似たもので代用することにしたそうです。

その経緯があいまいなまま、私たちがマイケルズ・ペッツ社にアドバンス（前渡金）として渡した20万ドル（約2000万円）は、戻ってきませんでした。一方で、バンダイとは当然契約解消となったため、私たちは、バンダイから受け取っていた2000万円のアドバンスを返還せざるを得なくなりました。

こうして、マイケルとの最初の仕事は、私にとって最悪のものとなりました。会社に損失を与えただけでなく、大切なクライアントからの信用も失ってしまったのです。

この時はまさか、10年にわたってマイケルと交流を持つことになるなどとは、思ってもいませんでした。

「マイケル・ジャクソンは、お金では動かない」

マイケルは、ぬいぐるみが彼の期待通りにできあがらなかったことに失望し、ボブ・マイケルソンと仕事をする意欲をすっかり失くしてしまいました。マイケルは、一度「裏切られた」と感じると、もう、その人を信用できなくなってしまうのです。マイケルズ・ペッツ事業に見切りをつけたボブは、会社をたたんでしまいました。

一方、ビル・ブレイは、この一件で私たちが金銭的窮地に追い込まれたことを知っていました。ビルはマイケルに、「マユミたちはあくまでも被害者であり、責任はない」と進言し、独占権ではないものの、私たちがマイケルのライセンス事業の日本のエージェントになれるよう、取り計らってくれたのです。

それ以来、ビルは私が持ち込むどんな小さな仕事もマイケルに伝え、便宜を図ってくれました。マイケルの他の仕事に比べると、私の仕事はいつもゼロの桁（けた）が少なかったのですが、ビルが動いてくれたおかげで、マイケルはいつでも、快く時間を取ってくれたのです。

「マイケル・ジャクソンは、お金では動かない。どんな小さな契約でも、ファンを喜ばすことができるならオーケーだ」と、ビルはよく言っていました。

さらにビルは、マイケルのライセンス契約を扱う顧問弁護士、ジョン・ブランカと私たちの間を取り持ってくれました。ジョンは、１９８５年にマイケルがビートルズの楽曲一式を４７５０万ドル（約47億円）で購入した際、手腕を発揮した辣腕（らつわん）弁護士です。

アメリカのエンタテイメント界の契約の多くを手がけていたジョンにとって、私たちの仕事は、契約金額もロイヤリティも、決して多くはなかったはずです。最初のうちは、契約書の送付なども後回しにされがちだったのですが、やはりビルの計らいにより、すぐに対応してくれるようになりました。おかげで私たちは、いくつものビジネスのチャンスを逃さずにすんだのでした。

仕事への情熱、ファンへの愛情

＊　＊　＊

マイケルのこだわりに脱帽

マイケルと出会って間もない頃、彼の仕事への情熱や、ファンへの愛情の深さを思い知らされた出来事がありました。

1987年、マイケルの来日公演を記念して、私は「銀座山崎」（現・ギンザタナカ）や西武百貨店と協力し、マイケルの肖像を刻印したメダルの商品化を行いました。銀座山崎は、イギリスのクイーンエリザベスのコインメダルを輸入販売していましたが、自社で人物を彫刻したコインメダルを作るのは、この時が初めてだったそうです。

まずはサンプルを作るため、肖像デザインの基となるマイケルの写真を銀座山崎に

提出することになりました。しかし、近く来日するマイケルにサンプルを見せ、アプルーバル（許可）をもらうためには、アメリカと相談をしている時間はありません。マイケルのアシスタントから「コンサートプログラムに使用する写真を使ってもよい」との指示が出たこともあり、私は勝手に写真を選び、渡してしまいました。

予定通り、マイケル来日中にメダルのサンプルはできあがったのですが、マイケルからはなかなかアプルーバルがもらえませんでした。どうも、前髪の垂れ方が気に入らなかったようです。ステージ上での写真ではなく、素顔のマイケルの写真を渡したので、なかなかイメージがつかめず、メダルの型を作る職人さんも苦心していました。

2、3度作り直したものの、結局日本滞在中には返事をもらえず、私はサンプルを持って、銀座山崎の担当者、坂巻さんとともに、マイケルの次の公演地、香港に飛びました。香港でアプルーバルをもらえなければ商品開発が頓挫（とんざ）してしまいます。

飛行機の中で「大丈夫でしょうか。ここで何とかしないと……」と不安がる坂巻さんに、私は言いました。「指示通りに直っているから大丈夫よ。それに、マイケルはいつも、部屋を暗くしているもの。よく見えないと思うわ」。

香港に到着すると、ビル・ブレイがマイケルの時間を取ってくれました。ホテルのマイケルの部屋は案の定、間接照明だけで薄暗かったため、「この暗さではサンプルも見にくいし、きっとすぐにOKが出るだろう」と、私は思いました。

ところが、私の安易な期待は一瞬にして崩れ去りました。マイケルが、電気スタンドとルーペを、テーブルの下から取り出したのです。

私は半ばあきらめの境地でしたが、マイケルはメダルを綿密に調べ、「ノー」と言う代わりに、いくつかの修正を求めてきました。彼の指摘は「頬骨が高すぎる。影ができるし、角度がつきすぎてしまう」「鼻の形も少し違う」というものでした。必死でメモをとる私に、マイケルは言いました。「僕はファンにハッピーになってもらいたいんだ。わかってくれる?」。私は、「ははっ」とひれ伏す思いでした。彼は続けて言いました。「修正をしてくれると信じているから」と。

帰りの飛行機の中で、私は猛反省しました。日本の企業とマイケルのビジネスをつなぐ私は、マイケルの代理人であり、マイケルを理解して彼を守るべき立場にあります。「マイケルはいつも、ファンのために何がベストかを考えている」ということを、

"LET'S BE FRIENDS"
銀座山崎のゴールド・マイケル・コインメダル

Memories of Michael Jackson

誰よりも理解しなければならない私が、何というざまでしょう。そもそも私は、時間がなかったとはいえ、マイケルらしさがあまり表れていない写真を選んでしまいました。マイケルが常に、ファンに喜ばれる商品作りを求めていることを誰よりもわかっているはずの私が、商品の発売時期を案じるあまり、ビジネスペースで事を進めてしまったのです。もっと時間をかけて、注意深く写真を選ぶべきでした。

私は自分が恥ずかしくなりました。マイケルが、9月のウェルカムパーティーで「バブルスの目が違う」と言ったあの時に学ぶべきだったのに、と。同時に、人として大切なことを教えてくれる、マイケルという素晴らしい人と仕事ができる幸せを、神に感謝しました。

コインメダルが完成した時、彼が身につけられるようにチェーンをつけました。私はそれを持って、マイケルが滞在していたニューヨークへ飛び、「もしこれでOKならこのコインメダルと一緒に写真を撮ってくれる?」と言いました。彼は「OK」とメダルに満足しているポーズをとってくれました。

しかしマイケルは、メダルを身につけてはくれませんでした。彼は言っていました。

「僕は美しい宝石は好きだけれど、身につけることはしないんだ。腕時計もしないんだよ」「ただ、人にプレゼントするのは好きだよ。喜んでもらえるから。それから、ステージでキラキラした衣装を着るのは好きだけど、ステージ以外では何も身につけないで楽でいたいんだ」と。

なお、この「ゴールド・マイケル・コインメダル」は、1987年12月15日に発売し、2万2000円で販売。7000個があっという間に完売しました。収益の一部は、マイケルの希望で、日本ユネスコ協会連盟を通じて、世界の識字教育に使われることになったようです。

また、発売に先立ち、マイケルは1987年10月18日の午前中に、銀座山崎の本店を訪問しています。この時、記念にプレゼントされた金の兜は持ち帰られ、その後ネバーランドに飾られました。

努力の人、マイケル

私は一度、マイケルに「自分は誰のためにパフォーマンスをしているのか」「どうしたらより多くの人々に楽しんでもらえるか」「ファンが自分に期待しているものは何だろうか」と尋ねられたことがあります。彼と交わった多くの人が、マイケルに同じ質問をされているようです。

マイケルは常に心の中で、この問いかけを繰り返していたのでしょう。

そしてマイケルは、これらに答えてくれる意見や助言には、いつでも聞く耳を持っていました。

マイケルは制作面だけでなく、パフォーマンスの面においても徹底した完璧主義者で、そのための日々の練習量はハンパではありませんでした。

ビル・ブレイによると、マイケルはロサンゼルスのボイストレーナーに定期的に電話をかけて、歌声と発声を整えるボイストレーニングを電話で行っており、声の調子が悪い時は、それが何時間にも及ぶことがあったそうです。レコーディングの時は、

2時間くらいかけてボイストレーニングを行っていたとのことです。
また、マイケルはいつも歌を口ずさんでおり、移動中も車の中で終始口ずさんでいました。彼は、ベストコンディションで声を出す方法を学んでいたのです。
私は、何度もマイケルのコンサートを観ましたが、毎回、ステージ上の彼から伝わってくるエネルギーにはすさまじいものがありました。
私は音楽は好きですが、ポップスやロックに関する知識はごく一般的で、正直、マイケルの音楽についても語れるほど詳しいわけではありません。コンサートは好きでよく出かけるし、いつもそれなりに感動するのですが、マイケルのコンサートには、ほかの人とは違う何かがありました。
その理由について、私は「彼は歌も踊りも天才だから」と漠然と思っていたのですが、ある日、彼のコンサート映像を見て気がつきました。そこには、激しいダンスをしながら息を切らして歌うマイケルがいたのです。コンサート会場は熱気で盛り上がっているので、パフォーマーの息の切れや多少の音程のズレはまったく気になりませんが、収録された音を静かな場所で聴くと、それらが顕著にわかりました。マイケル

は踊りながら、全曲本当に歌っていたのです。

当たり前だと思われるかもしれませんが、実はそうでもないようです。音楽業界の知人に聞いたのですが、通常、ダンスを盛り込んだステージでは、事前に歌をレコーディングしておいて、口の動きだけを合わせる、いわゆる「口パク」を行うことが多いそうです。

確かに、テレビの音楽番組で歌って踊るアイドル系のグループは、激しく動いているのに息一つ切れず、音程も完璧に保って歌っていて不自然です。

しかし、テレビはともかく、コンサートでも、踊りがある曲に関しては口パクを行うのが普通だと聞いて、驚きました。昔は音質が異なるため、生音と録音に差が生じたのですが、最近では音響技術の向上で、よほど耳の肥えた人でないと聞き分けられないそうです。コンサートは生音を聴くためのものと思っていましたが、高い料金を支払って、会場でＣＤの音を聴かされる場合もあるのです。

では、世界最高クラスのテクニカルチームを持つマイケルが、何故口パクをしないのでしょうか。

それは、フェイクだからです。会場に来てくれたファンのために、全身全霊を込めて歌う。それがマイケルにとっては、当然なことだったからでしょう。

ある時、マイケルは「自分が観客にエネルギーをぶつけると、観客からもすごいエネルギーが返ってくる。それがたまらない」「でも毎回、コンサートが終わると、翌朝の8時頃まで眠れない」と言っていました。

インターバルを入れず、連日コンサートを行うのは、マイケルにとっては非常に困難なことでした。それほど、一回一回のコンサートに全精力を傾けていたのです。

「どうしたらより多くの人々に楽しんでもらえるか」

前にも書いたように、マイケルは常に「どうしたらより多くの人々に楽しんでもらえるか」と考えていました。

その一つの方法が、お客さんをステージに上げることでした。子どもたちをステージに呼んで、一緒に踊ったこともあります。

実は私の三女のメロディーも、6歳の時、姉やほかの子どもたちとともに、マイケルのステージに立たせてもらいました。ビル・ブレイが、私の娘たちに「マイケルと一緒にステージに上がりたいかい？」と誘ってくれたのです。メロディーは人一倍喜びました。

彼女の子ども時代の夢は、映画スターになることでした。私たち夫婦の友人で、映画プロデューサーの山本又一朗さんが我が家を訪ねてくると、彼女はいつもフリルがたくさんついたドレスに着替えていました。そんな彼女は、マイケルとステージに立つことを、スターダムへの道だと思ったようです。

しかし、いざステージに上がると、ほかの子どもたちは元気に踊っているのに、私の娘たちはコチコチにかたまってしまいました。華々しい照明と大観衆に圧倒されて、ステージの恐怖を味わったのです。

それ以来、メロディーは映画スターになる夢をすっかりなくしてしまいました。

また、マイケルは、女性を一人ステージに上げ、ハグをして一緒に歌うというパフォーマンスをしたこともあります。
するとファンの女性たちは、ステージ上の女性に自分を投影し、自分がそこにいるような気持ちになるのです。
ただ、海外のコンサートではたまに、曲が終わってもマイケルから離れようとしない、困ったお客さんもいたようです。

余談ですが、マイケルは、日本のファンの礼儀正しさに、ひどく感心していました。
マイケルの東京ドームでのコンサートは毎回満席ですが、出口が限られているため、帰りは少しずつしか出られません。
そこで順番に席を立って出口へ向かうよう、場内アナウンスが流れますが、あの熱狂的なコンサートの後に、人々が指示にしたがって大人しく出ていくのが、マイケルには新鮮だったようです。
その様子を見たマイケルは「信じられない」「行儀がいい」と驚いていました。

「ありがとう。彼女に返事を出すよ」

マイケルのコンサート会場には、毎回、アリーナ席の中央に櫓(やぐら)を組んだＶＩＰ席が設けられていました。そしてそこへ入るには、バックステージパスが必要でした。コンサートのＶＩＰ席というと、普通はスポンサー関係のお偉方やセレブで占められるものですが、マイケルの場合は少し違います。そこは彼にとって、大切な人々のための席なのです。

もちろん、公演実現のためにお世話になったスポンサーも時には招待されますが、メインは施設の子どもたちや、ホテルのメイド、シェフなど、普段なかなかチケットが買えない人たち、マイケルが日頃お世話になっている人たちです。

マイケルの要望で、毎回、50枚のバックステージパスをビルが管理し、彼らを招待していました。招待された人々は、まず楽屋に案内されてマイケルと会い、一緒に写真を撮るなどのもてなしを受けてから、コンサートを楽しむのでした。

そしてマイケルは常に「子どもたちや、ホテルのメイドさんたちに、ちゃんとＶＩＰ席のチケットが渡ってる？」と気にしていました。

マイケルと接していていつも思うのは、彼は人を区別して接しないということでした。メイド、政治家、ファン、スポンサーなど、相手が誰であっても、彼の態度は一貫しており、分け隔てしませんでした。また子どもと話す時は、必ず膝を落とし、子どもの目線に合わせていました。

そしてマイケルは、ファンのためにできること、しなくてはならないことは、何でもする人でした。それも、最善を尽くすのです。

人一倍多くのサインを頼まれるマイケルですが、夜、スイートルームのダイニングテーブルの上に、山のように積み重ねた色紙を置いておいても、翌日にはちゃんと、全部にサインが書かれていました。しかも、どのサインも丁寧でした。

これも私の娘に関する話になってしまいますが、日本のアメリカンスクールに通っていたメロディーが高校2年生の時、アビーという友だちがいました。当時、スターを夢見ていた彼女は、マイケルの大ファンで、すべての歌と動きを知っており、休み時間には、それらを披露していました。

ある時、私がマイケルと親しいと知ったアビーは、メロディーにマイケル宛てのフ

アンレターを託し、「この手紙を、あなたのお母さんからマイケルに渡してほしいの」と頼みました。私は、ネバーランドにマイケルを訪ねていった時に、それを手渡したのですが、彼は私の目の前で封を切り、内容に目を通し、「ありがとう。彼女に返事を出すよ」と言ってくれたのです。

帰国した私は、すぐにメロディーに事の次第を伝えましたが、アビーを期待させすぎないよう、釘をさしました。ところが2、3週間後、メロディーが学校から、興奮した様子で帰ってきました。そして言ったのです。「マミー！ アビーにマイケルからサイン入りのポスターが届いたの！」と。

アビーはマイケルからの贈り物を、学校に持ってきたそうです。ポスターには「親愛なるアビー、歌と踊りを頑張ってね。愛を込めて。マイケル・ジャクソン」という言葉が添えられていました。

私は感激して、体の中に温かいものが流れるのを感じました。彼は約束を守り、アビーを励まし、彼女の夢を後押ししてくれたのです。

キャピトル東急ホテルにて撮影
左からミシェル、マイケル、マーゴ、メロディー

Memories of Michael Jackson

「君はどんな音楽が好き?」

マイケルは、楽しいことや不思議なことに対して、常に好奇心を向けていました。どこに仕事のヒントが転がっているかわからないからです。来日中も、よく玩具店へ行きたがっていましたが、それは単におもちゃがほしかったからではなく、何らかのサプライズを探し求めていたのです。

たとえば「BAD」ツアーでは、マイケルは「ステージから突然姿を消し、次の瞬間、かなり離れた場所に現れる」というマジックを披露し、観客を驚かせました。このマジックは、マイケルが世界で最も有名なマジシャン、ジークフロイド&ロイに教えてもらったものです。

それ以来、マイケルは彼らとすっかり仲良くなりました。彼らが、大人気だったマジックショー「ツムラ・イリュージョン」に出演するため、東京のホテルに泊まっていると知って、わざわざ訪ねていったこともあります（もっとも、その時マイケルもちょうど、来日中だったのですが）。マイケルが語っていたのですが、彼らの部屋に

はホワイトタイガーがいたそうです。
ジークフロイド&ロイからマジックを教えてもらったお礼に、マイケルは彼らのために曲を書きました。作曲にあたって、マイケルが彼らの公演先であるラスベガスに、わざわざ運び込んだ機材のあまりの数の多さに、ジークフロイド&ロイはびっくりしたそうです。

またある時、ビル・ブレイから、こんな話を聞いたことがあります。
ビルには、ホラー映画が大好きな友人がいました。マイケルと彼は、FSXのメイクアップ技術や、好きな恐怖シーンなどの話題で盛り上がったこともありました。
ある夜、マイケルは、フィギュアのコレクターでもある彼の家で、ユニバーサル映画のモンスター・シリーズのフィギュアを見せてもらいました。フランケンシュタイン、ドラキュラ、狼男、ブラック・ラグーンのミイラなどのフィギュアにマイケルは夢中になり、精巧に作られている細部に興味を持ちました。
なかでもマイケルの注意を引いたのは、暗闇で光るフィギュアの姿でした。それらは一段と恐ろしく見え、マイケルにあるアイデアをひらめかせました。

そして、そのアイデアは、「Victory」ツアーと「BAD」ツアーの「Thriller」の場面に実際に取り入れられました。マイケルは、特殊メイクにより、暗闇の中で不気味に光るゾンビたちを、公演に登場させたのです。黒い背景とスモークがかかったステージにより、彼らの顔、手足、衣装の不気味さは、より一層際立って見えたそうです。

私も、マイケルの好奇心の強さを目の当たりにしたことがあります。

ニューヨークのホテルに滞在中のマイケルを訪ねた時、マイケルのスイートのリビングルームに、見たこともない若者たちが8人ほど輪を描いて座っていました。そして、その中心にマイケルがいたのです。

「彼らは誰なの？」とビルに尋ねると、「自分の作品やパフォーマンスをマイケルに売り込むために、ホテルのロビーでマイケルが出てくるのを待っていた若者たちだよ。マイケルは時々こうやって彼らを部屋に招いて話をするんだ。マイケルは彼らの考えを知りたいんだよ」との答えが返ってきました。

マイケルは、若者たちの話を真摯(しんし)に聞いていました。そこには大スターの驕(おご)った姿は微塵(みじん)もありませんでした。時にはマイケルが、彼らに「君はどんな音楽が好き？」

「君は何がしたいの?」といった質問をし、「歌が好き」と答えた若者には「歌ってみせてくれる?」とリクエストして、じっと歌を聴いていました。

その姿に私は衝撃を受けました。大スターのマイケルが、無名の若者たちに、率直に意見を求めているのです。自由に外出ができないマイケルにとって、こうした若者たちとの交流は、時代の流行や若者たちの好む音楽やダンスを生で知ることができる唯一の機会だったのです。

マイケルを一躍スターダムへと押し上げた、あの「ムーンウォーク」も、こうした、マイケルの飽くなき好奇心や、たぐいまれな観察力、研究、努力から生まれました。

ビル・ブレイから聞いたのですが、マイケルはフレッド・アステアやジーン・ケリー、チャールズ・チャップリンなどのダンスを、ビデオで徹底的に研究したそうです。気になる動きは何百回もストップモーションをかけて分析し、それでもステップがわからなかったマイケルは、フレッド・アステアを訪問しました。

たった一つのステップの技を訊くために訪ねてきたマイケルを、アステアは歓迎したそうです。アステアはマイケルに、そのダンスシーンをどうやって撮影したかを説

明しつつ、「僕がやった通りに真似したらダメだよ。君は新しいダンスを生み出さなくてはいけない」とアドバイスしてくれました。

1983年、モータウンの25周年コンサートで、マイケルが初めてムーンウォークを披露した時には、アステアからマイケルにお祝いの電話がかかってきました。マイケルは自伝書「ムーンウォーク」をフレッド・アステアに捧げました。

フレッド・アステア独特の優雅なステップを参考に、マイケルがいかにしてオリジナルのムーンウォークを習得したかについては諸説ありますが、日本のゲームメーカー、セガとマイケルの共同プロジェクトで通訳を務めた、セガ・アミューズメント・USA社のシニア・バイス・プレジデントの中川昌浩さんは、ビルから、次のような話を聞いたそうです。

ある時マイケルは、人気グループ、ソウル・トレイン・ダンサーズの一員、ジェロー厶・キャンディデイト（ステージネーム：キャスパー）のステップを見て興味を覚え、「どうやるのか教えてくれない？」と頼みました。

本来のムーンウォークの基本は「前後に動かず、同じ場所でステップを踏む」という技法です。キャスパーは最初、マイケルにこの方法を教えたそうです。

１度目はうまく動けなかったため、マイケルはキャスパーに再度レッスンを乞いました。その2度目のレッスンで、キャスパーはマイケルに、前に歩いているように見せながら後ろに下がる「バック・スライド」の方法を教えました。するとマイケルは「そう、そのやり方を知りたかったんだ」と喜び、すぐにコツをつかんで、１時間ほどでマスターしたのです。

マイケルは「どうしてもレッスン料を渡したいんだけど、いくら払えばいい？」とキャスパーに尋ねました。するとキャスパーが１０００ドルを希望したため、ビルがマイケルに代わって支払いました。

後にキャスパーは、「１０００ドルは、当時の僕には大金だった。でも、あのダンスがあんなに有名になるなら、もっともらっておけばよかったよ」と冗談まじりで語ったそうです。

この話を教えてくれた中川さんも、マイケルに負けず劣らずの好奇心の持ち主です。

彼はムーンウォークを初めてテレビで観て以来、どうやるのか不思議に思い、あれこれ研究や挑戦を重ねて、自己流ながらもついに習得したのです。中川さんいわく、ムーンウォークをやるには、靴底および床が滑らかであることが重要で、ゴム底のスニーカーでは難しいそうです。

ちなみに中川さんは、計4回、マイケルに会っています。私は毎回同席していたのですが、3回目にマイケルに会った時、中川さんはなんと、マイケルとビルの前で、自己流のムーンウォークを披露してみせたのです！

そしてマイケルは、ニューヨークのホテルで若者たちと接していた時同様、あのソフトな話し方で、中川さんのムーンウォークを「素晴らしい！」と褒めてくれたのでした。

みんなへのプレゼントだよ

A present for my crew

2

マイケルが愛した日本人たち

The Japanese whom Michael cherished

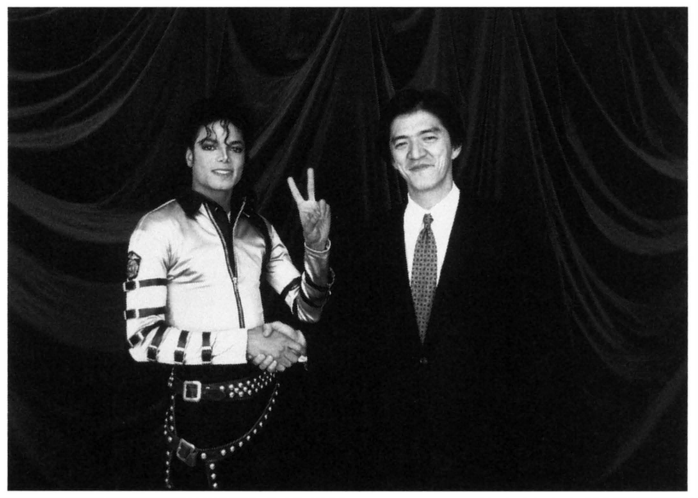
マイケルと「キャピトル東急」

＊　＊　＊

滞在先は「キャピトル東急」に決定？――鈴木成和さんの挑戦

1987年、マイケルが日本で、初のソロ公演をした時のことです。公演に先立ち、まずビル・ブレイが、ロサンゼルス市警の警察官をしていた息子のロードリックとともに来日しました。一行の日本滞在に関するあらゆるチェックのためです。

その際、彼は私のオフィスを訪れ、私にツアースケジュールを手渡すと「公演以外の時間は、できるだけマイケルを公演関係者から離し、リラックスさせたい」「プライベートな時間のアテンドを、マユミに頼みたい」と言いました。

海外アーティストが来日公演を行う時は、普通、プロモーターがアーティストを招（しょう）

コンサートステージ裏にて撮影
キャピトル東急ホテルの鈴木成和氏と

Memories of Michael Jackson

聘(へい)し、滞在中の世話をし、旅費や滞在費を負担します。しかし、私はアメリカで育ち、アメリカで教育を受けたので、ビルやマイケルにとっては、日本人のプロモーターよりもコミュニケーションがとりやすかったのでしょう。公演にまったく無関係な私がマイケルに同行すると、当然プロモーターはいぶかるはずですが、ビルに頼まれると嫌とは言えず、引き受けることになりました。

するとビルからさっそく「マイケルたち一行が泊まるホテルを探してほしい」という依頼がありました。もともと、マイケルには常宿にしているホテルがあったのですが、今回のツアーでは、宿泊場所を変えたい、とのことでした。

私は大急ぎでホテルを探し、ジャックの友人のアドバイスにしたがってキャピトル東急ホテルを勧めました。

ロードリックを連れて下見に訪れたビルの応対をしてくれたのが、キャピトル東急ホテルの鈴木(すずき)成和(しげかず)さんでした。

鈴木さんによると、1987年当時、ヒルトン・チェーンとの提携終了で、世界的な知名度を持つ「ヒルトン」の名称を外したキャピトル東急ホテルは経営の危機に直

面していたそうです。諸事情から、海外の顧客の間に「キャピトル東急は倒産した」という噂が流れ、稼働率は40パーセントほどに激減していました。
上層部から「改善策を考えるように」との指示が下り、セールスマーケティングのセクションにいた鈴木さんが出した案の一つが「海外の有名人に泊まってもらい、メディアの取材を受けて、ホテルの知名度を上げること」でした。
その頃、海外のセレブは、ほとんどが帝国ホテルかホテルオークラに泊まると相場が決まっていました。そこで鈴木さんは、ミュージシャンに注目し、レコード会社各社の洋楽部門のプロモーターに、「メディアの取材を受けるうえで必要なら、別にスイートルームを無料で用意します」「記者会見用の平台も、安く提供します」「滞在中のアテンドはすべて私が行います」といった具合にセールスをかけたのです。
その甲斐あって、徐々に宿泊するアーティストは増えていったのですが、マドンナやローリング・ストーンズなど、話題性のあるトップクラスのアーティストは、別のホテルを常宿としており、なかなか泊まってはくれませんでした。マイケルに関しても、プロモーターからは「すでに泊まるホテルは決まっている」と言われており、あきらめていたそうです。

そんなある日、鈴木さんのデスクに、フロントから「マイケル・ジャクソンの関係者だという方たちが、ホテルの下見に来ています」という電話がかかってきました。
半信半疑でフロントに行ってみると、どこにでもいるような、普通のアメリカ人男性二人が立っていました。それがビルとロードリックだったのですが、鈴木さんは最初、「この人たち、本当にマイケルの関係者なのかなあ」と不審に思ったそうです。しかし駐車場からの動線などを説明しながら一緒に歩いているうちに、すっかり打ち解け、ホテル内のコーヒーハウス「オリガミ」で食事をすることになりました。すると、片方の男性が、「MJJプロダクション」と書かれた名刺を取り出し、「部屋の設備は、直してもらえるのか？」と質問してきたのです。
鈴木さんが、「どうすればいいですか？」と尋ねると、ビルは「部屋が古いから、家具やステレオを入れ替え、とにかくゴージャスにしてほしい」「マイケルが泊まるスイートの二つのベッドルームのうち、一つは全部家具を取り払い、周りの壁を鏡で覆い、床にはダンス用のタイルを敷いてほしい」「フロアの半分を借り切るから、フロアの真ん中にドアと壁を作り、非常口にアラームをとりつけてほしい」「できれば、フロアのもう半分にも、客を入れないでほしい」など、さまざまな条件を出し、最後

に「できるか?」と念を押してきました。

直感的に「もしためらったら、この話は流れる」と思った鈴木さんが、「私の責任で上司を説得し、全部やります」と答えると、ビルは「わかった。じゃあ、マイケルを連れてくるよ」「君に任せるから、マイケルが日本にいる間は、ちゃんとホテルにいてくれよ」と言い、そのままタクシーで帰ってしまったのです。

ちなみにビルは、その時にオリガミで食べたかき氷がずいぶん気に入ったらしく、「これは、いつでも食べられるのか?」と鈴木さんに尋ねてきました。鈴木さんは「冬でも食べられるよう、用意します」と答え、その後、マイケルたちが来日するたびに、倉庫からかき氷の機械を出していたそうです。私も、ビルや、一見いかついセキュリティスタッフのメンバーたちが、みんなで揃ってかき氷をつついている姿を、何度か見かけたことがあります。

「マイケルの部屋」ができるまで

ビル・ブレイが帰った後、残された鈴木さんは、狐につままれたような気分で「どうしよう」「今の話、本当かなあ」と思ったそうです。すると3日後、マイケルのツアーに関する手配全般を取り仕切っている、ロサンゼルスの旅行代理店のグレタ・ウォルシュという女性から、書類がFAXで送られてきました。そこでようやく「これは、本当かもしれない」と思った鈴木さんは、上司に報告して、マイケルを迎えるためのプロジェクトを立ち上げました。

しかし、「フロアを貸切に」「フロアの真ん中にドアと壁を作る」といった要求はともかく、「家具やステレオをすべて入れ替える」となると、あまりにも費用がかかりすぎます。社内でも「無理なんじゃないか」という声が上がったそうですが、頓挫すれば完全に信用を失ってしまいますから、鈴木さんは必死で知恵をしぼり、二人の友人の力を借りることにしました。

そのうちの一人は、鈴木さんの遊び仲間で、ソニーの盛田昭夫元会長の長男、英夫

さんでした。「今度、マイケル・ジャクソンがキャピトル東急に泊まるんですが、テレビやステレオをワンセット、タダで貸してもらえませんか?」と電話でお願いしたところ、盛田さんは「ああ、いいよ。一番いいやつを持っていくよ」と、快く引き受けてくださったそうです。

そしてもう一人は、音楽プロデューサーの川添象郎(かわぞえしょうろう)さんでした。その頃、日本に短期滞在する外交官や外資系企業の社員が増えており、川添さんは、彼らに高級家具をレンタルするビジネスを始め、成功していました。そこで、川添さんに「家具をタダで貸してください」とお願いしたところ、やはり快く引き受けてくださったのです。ただしその際、一つだけ条件を出されました。

その条件というのは、新潮社から発刊されたばかりの写真週刊誌「FOCUS」に、「これが、マイケルが泊まる部屋だ」といった内容の記事を載せることでした。本当は、マイケルが泊まるホテルは極秘だったのですが、鈴木さんは内緒で取材を受け、記事は大きな話題になりました。その代わり、鈴木さんは、高級な家具の数々を借り、マイケルにふさわしい部屋を無事に調えることができたのです。

準備を進める一方で、鈴木さんは、ビルやグレタと打ち合わせをするため、ロサンゼルスへ飛びました。スケジュール等が入り組んでおり、電話やFAXでのやりとりだけでは不安だったからです。ビルは「車なんか、借りなくていいから」と、鈴木さんを毎日ホテルまで迎えに来ては、いろいろな所に連れていき、鈴木さんは、ビルやグレタとの信頼関係を深めていきました。

また、ロサンゼルス滞在中に、鈴木さんは二人の公認会計士を紹介され、「今回のツアーは、プロモーターではなく、うち主導で行うので、ホテル代は直接あなたに支払う」と言われました。そこでようやく「本当に来てくれそうだな」と確信を持てるようになったのですが、実はこの時点ではまだ、もともと彼らが泊まるはずだったホテルに、キャンセルの連絡が入っていませんでした。そのホテルやプロモーターからは「マイケルのマネージャーのフランク・ディィレオからは、ホテルを変えるという話は聞いていない」「鈴木が勝手に動いているだけじゃないのか」と言われ、一時は大騒ぎになったそうです。

当時、日本のプロモーターの間で、「ビル・ブレイ」という存在があまり知られていなかったことが、騒ぎの大きな原因でした。鈴木さんはロサンゼルスへ行った際に

「フランクはあくまでも、ビジネス面でのマネージャーだ。ビルは、マイケルが唯一信頼している、親代わりのような存在で、移動や宿泊、食事に関することは、彼が決めている」「彼がキャピトル東急に泊まると言えば、それは絶対だから、何も心配しなくていい」と言われていたのですが、プロモーターたちは、フランクがすべてを仕切っていると思っていました。そのため鈴木さんも、マイケルが来日するまでは、「会社中動かして、改装までして、これでドタキャンになったらどうしよう」と、ろくに寝られなかったそうです。

マイケルが日本に到着する日、鈴木さんは、飛行機が成田空港に着いた頃から、地下の駐車場でずっと待機していました。やがて、歓声に包まれながらマイケルたちが乗った車が入ってきて、ビルにマイケルを紹介されて、握手して……。そこでようやく「やった、本当に来てくれた」と実感がわいてきたそうです。

しかし鈴木さんには、まだ難問が残っていました。何しろビルは、改造後の部屋は一度も見ていないわけですから、部屋を見せた途端に「これじゃダメだ」と却下されるおそれもあります。しかし、部屋を見たビルからは、あっさりＯＫが出ました。

また来日初日は、プロモーターたちがまだマイケルやビルと親しくなかったため、鈴木さんはビルに頼まれて、マイケルのために六本木のレコードショップを貸切にしてもらいました。しかし、「キャピトル東急の者ですが、マイケル・ジャクソンがそちらに行きたいと言っているので、貸切にしてもらえませんか？」とお願いしても、最初はなかなか信用してもらえなかったそうです。

なお、マイケルたちが滞在している間は、ビルとの約束通り、鈴木さんがすべてのアテンドをしていました。従業員用のエレベーターをマイケルたち専用にして、鈴木さん自身が操作し、「何かあったら呼んでください」と、同じフロアの部屋に24時間態勢で泊まり込み、「マイケルが外出しそうだ」という情報が入ると、セキュリティスタッフと一緒に待機し……。おかげで、同じように24時間態勢で働いていたセキュリティスタッフたちと、すっかり仲良くなったそうです。

ビル・ブレイのアルバムから
ビルの親友の息子トニーと

Memories of Michael Jackson

「僕の部屋をきれいにしてくれてありがとう」

当時、「マイケルが泊まるホテルは、水道の蛇口からエビアンが出るように改造するらしい」とか「マイケルは、ホテルに高圧酸素のカプセルを持ち込み、その中で寝るらしい」といった噂が、世界中をかけめぐっていました。ワールドツアーの最初に泊まるのがキャピトル東急ホテルだったため、鈴木さんには、アメリカのラジオ局からも、電話インタビューの申し込みがありました。そのインタビュー中に、噂の真偽も尋ねられたそうです。

確かにマイケルは、エビアンしか飲みませんでしたし、ホテルには相当な数のエビアンのボトルが常に用意されていました。また、私も、マイケルが高圧酸素のカプセルに入っているという新聞記事を見たことはあります。それが本当なら、好奇心旺盛なマイケルのことですから、きっと、「その中に入ると寿命が延びる」と聞いて、試してみたくなっただけなのではないかと、私は思っています。

もちろん、「ホテルの水道の蛇口からエビアンが出るように改造する」とか「ホテルに高圧酸素のカプセルを持ち込んだ」というのは、まったくのでたらめです。

鈴木さんによると、マイケルが来てから特に頼まれたのは、部屋に加湿器と、当時まだ珍しかった空気清浄機を何台か設置すること。そのくらいだったそうです。

しかしマイケルが、ほかの外国人アーティストたちとはまったく違っていたのも、事実のようです。

アーティストはたいてい、夜遊びをしたり、飲みに行ったり、時には勝手にいなくなったりするのに、マイケルはほとんど部屋にこもりっきり。外出するにしても、行き先は、大型玩具店やゲームメーカーのセガ、東京ディズニーランドなど、きわめて健全な場所ばかりでした。

なおマイケルは、ホテルにいる間、ダンススタジオに改造されたベッドルームで、毎日ダンスの練習をしていました。

部屋で映画を観るのも好きでした。

鈴木さんはマイケルに頼まれ、ビデオを大量にレンタルしたこともあるそうです。最初の頃は、マイケル自身が選んでいたのですが、そのうちマイケルから「スズキに選んでほしい」というリクエストが来たため、「一体何を持っていけばいいんだろう」

と、相当頭を悩ませたとのことでした。
マイケルは、グロテスクなシーンが苦手で、ハッピーエンドの映画が大好きでした。特にディズニーのアニメは、しょっちゅう観ていました。チャップリンなどの古い映画も、好んで観ていたようです。
ある時、ビル・ブレイとジャックと私がマイケルの部屋に入ると、彼は「The Good, the Bad and the Ugly」（邦題は「続・夕陽のガンマン」）を観ていました。私たちに気づいたマイケルは、ジャックを指差して「The Good」、自分自身を指差して「The Bad」（ちょうど「BAD」ツアーで来日していた時だったので）、そして最後に、ビルを指差して「The Ugly」と、ふざけて言ったのでした。

マイケルは部屋にいる時間が長く、外出しても、30分で戻ってくる時もあれば、一日戻ってこない時もあったため、鈴木さんたちは掃除をするタイミングを見極めるのに苦労しました。ホテルの従業員数名を常に待機させておいて、マイケルが外に出た瞬間に、みんなで急いで片づけたそうです。
マイケルはファッションにはまったく興味がありませんでした。服はすべて、これ

またファッションに興味のないビルが買い揃えていたそうです。

マイケルはいつも、白いTシャツに、赤または青のシャツ、丈が短めな黒いパンツ、シンプルなスリッポンのシューズ、という格好でした。日本にはそれを数セットしか持ってきていなかったらしく、ほぼ着たきりのような状態。ですから、鈴木さんたちは「明日も着るかもしれないから、急いで洗わなければ！」と、マイケルが外出した隙に衣類をクリーニングに出し、靴を磨いていたそうです。

しかしマイケルは、ホテルの従業員の間でも大人気でした。マイケルはいつも彼らに「僕の部屋をきれいにしてくれてありがとう。散らかし放題でごめんなさい」と声をかけていたのです。

マイケルが公演のために出かける時間になると、メイド、シェフ、ポーターといったホテルのスタッフたちが、マイケルの部屋があるエレベーターホールに整列してマイケルを見送りに出てきました。もちろん、「マイケル・ジャクソンが見たい」という気持ちもあったのでしょうが、誰もがいつの間にか、マイケルの細やかな優しさに惹きつけられ、公演の成功を心から願っていたのです。

また、ホテルの外にはいつも、ファンの女の子たちがたくさん立っており、マイケルが手を振ると、一斉にどよめいていました。マイケルにとってはそれが楽しかったらしく、窓際に行っては、よく手を振っていました。

一方、ホテルの中でもマイケルはしょっちゅう、チャーミングないたずらをしていました。

当時、「お菓子の袋のような外見で、手を突っ込むと、中の仕掛けにパチンと挟まれる」というおもちゃがありました。それを買ってきたマイケルは、ある日、鈴木さんに「これ、食べていいよ」と差し出しました。

実は鈴木さんは、そのおもちゃのことを知っていたのですが、マイケルや周囲の人たちは、期待を込めた眼差しで見守っています。「これは、驚いてみせなきゃまずいだろうなあ」と思った鈴木さんが、「わあ、痛い！」と大袈裟に騒いだところ、マイケルは、転げ回って喜びました。

鈴木さんは後で、ビルに「お前、よくやったなあ」と褒められたそうです。

私も何度か、いたずらを仕掛けられたことがあります。

ある時、ビルと私が食事を終えてマイケルの部屋に戻ると、マイケルは私たちに背を向けて本を読んでいました。ビルが声をかけると、振り向いたマイケルの顔には、恐ろしいフランケンシュタインの仮面が……。私は思わず「キャッ！」と叫んでしまいました。お面を外したマイケルの顔には、「してやったり」とばかりに、満面の笑みが浮かんでいました。

また、これは私がビルの部屋にいた時のことですが、セキュリティスタッフの一人が、私たちに「マイケルの部屋に来るように」と言いに来ました。

「何の用事だろう」と思いながら、私たちが部屋に入り、ビルがいつもの椅子に座ると、突然大きなおならの音が響き渡りました。マイケルが、ビルの椅子におならクッションを仕掛けていたのです。私たちは笑い転げました。

ひとしきり笑い終わった時、ビルが言いました。

「僕には要らないんだよ、これは。わかっているだろう」

マイケルは「もちろん」と答えました。ビルは普段から、しょっちゅうおならをしていたのでした。

「彼はとてもスマートなんだ」

しかしマイケルには、当然のごとく、非常にしっかりした一面もありました。マイケルのツアースタッフは総勢200名ほどでしたが、そのうちキャピトル東急に泊まったのは、マイケルのほか、プロデューサーのクインシー・ジョーンズ、ビル・ブレイ、セキュリティスタッフ数人、マネージャーのフランク・ディレオ、公認会計士二人、チンパンジーのバブルスと調教師のボブ・ダン夫妻、マイケルの友人たちなど、十数名でした。

鈴木さんが1週間ごとに各部屋の請求書をまとめ、公認会計士のところへ持っていくと、彼らは「この人は、部屋代も食事代も電話代も全部マイケル持ちだからOKだが、この人は部屋代のみマイケル持ちで、あとは自腹」「バブルスの餌のバナナはOKだが、調教師の食事は自腹」といった具合に、非常に細かく仕分けしていきました。まるで、会計事務所が丸々一軒引っ越してきたかのようでした。

公認会計士は「これは全部マイケルの指示なんだ。彼は頭がいいし、実は細かいんだよ」と言っていたそうです。

ところで私は、ホテルのマイケルの部屋に、幼い娘たちを何度か連れていったことがあります。娘たちはマイケルよりもむしろ、バブルスに夢中だったのですが、マイケルは「バブルスとは、こうやって遊ぶと喜ぶよ」とか「バブルスがいたずらするから、こういうことはしないでね」と親切に教え、一緒に遊んでくれました。また、娘たちがきれいなドレスを着ていると、いつもの優しい声で「プリティドレス！」と褒めてくれました。

しかし、そんな優しいマイケルが、ある日、子どもたちに囲まれて興奮しすぎたバブルスの頭をげんこつで叩いていました。「あのマイケルが、こんな手荒なことを？」と驚く私たちに、マイケルは「バブルスの頭はすごく固くて、全然痛みを感じないので、心配しなくていいよ」と言うのです。実際、バブルスはきょとんとしていました。

さらにマイケルはバブルスに「トイレに行ってこい」と言うのです。

アメリカでは、しつけとして、悪さをした子どもを部屋の隅などに座らせることが、よくあります。バブルスにとっては、トイレが反省の場所なのでした。

やがてマイケルが「もういいよ」と言うと、バブルスがトイレから出てくるのです

が――。その時何故か、水を流す音がしました。「バブルスはいつも、オムツをしていたはずなのに、水洗トイレを使っているの？　一体どういうこと？」と頭を悩ませる私たちに、マイケルは「彼はとてもスマートなんだ」と言い、手で口を覆って、クックックッと笑いました（それが、マイケルが笑う時の癖でした）。きっと人々を困惑させるために、バブルスをトレーニングしたのでしょう。

そんなバブルスをめぐって、ちょっとしたアクシデントもありました。マイケルが来日して1週間も経つと、だんだん鈴木さんの顔も知られるようになりました。マイケルのスタッフには箝口令（かんこうれい）がしかれていたため、情報を求めるマイケルのファンやマスコミから、「今日はマイケルはどこへ？」とか「今日は何をしてるの？」と尋ねられることも多かったそうです。

ある日、鈴木さんは、記者の一人に「チンパンジーのバブルスも一緒に泊まっているんですか？」と質問されました。日本では、盲導犬以外のペットをホテルに泊めるのは、衛生上、あまり良いことではないとされているため、「バブルスは、地下の駐車場に用意した、檻の中に入っています」と答えたのですが、まさにその瞬間、エレ

バンダイ社長室にて撮影
調教師ボブ・ダン氏とバブルスと一緒に訪問

Memories of Michael Jackson

ベーターが開いてバブルスが――。

また、マイケルが来日して最初の数日間だけ、同じフロアに、長期滞在の海外のお客さんが泊まっていました。

ある晩、そのお客さんから「ドアを開けたら、ゴリラが歩いていた」という電話が入ったのです。おそらくバブルスのことだったのでしょう。本当のことを言うわけにもいかず、鈴木さんは、電話に出た社員に「見間違いではないかと言っておきなさい」と指示しました。幸い、その後、特に問題にはならなかったようです。

ところで、1987年の来日時に、私は調教師のボブ・ダンから「マイケルとバブルスは、いつまでも一緒には暮らせないんだよ」と聞きました。チンパンジーは成長すると力が強くなり、危険だからです。

その話を聞いた私は、マイケルが帰国した後、一緒に仕事をしていた画家、スチュワート・マスコウィッツに頼んでバブルスのイラストを描いてもらい、マイケルにプレゼントしました。後日、それを受け取ったマイケルから「ありがとう。バブルスそっくりだよ」という、お礼の電話がかかってきました。

数年後、バブルスは調教師が経営する動物プロダクションに引き取られていきました。今もバブルスは健在です。26歳になった彼は、動物の老人ホームである、フロリダの類人猿センターで、元気に暮らしています。

声が出なくなったマイケル——Y医師の治療

1987年の初来日公演は、後楽園球場と阪急西宮球場、横浜スタジアム、そして大阪球場で行われたのですが、10月3日、横浜スタジアムでの公演初日終了後に、マイケルが身体のだるさを訴え、声が急激にしわがれるというハプニングが起こりました。翌4日に行われたコンサートの出来は、マイケルにとっては不本意なものだったらしく、彼は泊まっていたキャピトル東急ホテルの部屋で、何度も「ベストのショーを見せてあげられなかった」「ファンに申し訳ない」と言っていました。

ツアーに同行していたドクターが、マイケルの首にビタミンB_{12}の注射をうったのですが、まったく効きません。しかし1週間後には、大阪の西宮球場での公演が控えています。

そこで私は、内科のお医者さんで、東洋医学にも精通しており、英語も堪能なY医師に相談しました。Y医師ご一家とは以前、ご近所同士でした。子どもの年が近かったため、公園などで顔を合わせる機会が多く、家族ぐるみで親しくさせていただいていたのです。

Y医師からのお返事は「まずは声楽家などを診察している、耳鼻咽喉科の医師に診てもらってはいかがですか？」というものでした。ただ「私にも、多少は漢方や鍼（はり）などの領域から、お手伝いができるかもしれません」とのことだったので、それをマイケルに伝えたところ、「ぜひ東洋医学を試してみたい」「漢方や鍼をやってみたい」と、非常に興味を示したのです。

そこで私はY医師にお願いして、10月5日の夜に、ホテルへ来てもらいました。この時、Y医師は若い女性の看護師さんを連れてきていたのですが、人一倍シャイなマイケルは、彼女を見るなり、一旦寝室へ引き返し、わざわざサングラスをかけて出てきました。そして「悪いけど、診察中は、ドクターと僕と二人きりにしてもらえる？」と、ささやくように言いました。この日の診察は2時間に及び、看護師さんと私はそ

Y医師のアルバムから
キャピトル東急ホテルの部屋にて撮影

の間、リビングのソファに座って待っていました。

診察にそれだけ時間がかかったのは、マイケルからY医師に「鍼をしてほしい」というリクエストがあったためです。

Y医師の鍼治療は、全身のツボ約30カ所に、直径0・16ミリの細い鍼を軽く刺し、経絡(けいらく)のバランスをチェックして、正しい状態に戻すというものでした。さらにY医師は、お灸(きゅう)を施し、漢方薬も処方してくれました。好奇心旺盛なマイケルは、生まれて初めて見る鍼やお灸に興味津々で、Y医師の一つひとつの動作や診察鞄の中身について、いちいち「これは何?」「どういう働きがあるの?」「何故そうするの?」と質問攻めにしたそうです。

一方、Y医師はY医師で、マイケルがBGMとしてクラシック音楽を聴いていたことに驚き、何もない寝室の壁に、何故かバブルスのジャケットだけがかかっていたことを、ほほえましく思ったのでした。

鍼治療の翌日の10月6日には、マイケルの健康状態はかなり回復しました。マイケ

ルから、「もう一度Y先生の治療を受けたい」とのリクエストがあったため、この日再度Y医師の診察を受けたのですが、疲弊しきっていた身体はかなり回復し、経絡のバランスも見違えるほど良くなっていたそうです。また、マイケルがアメリカに帰ってからも一度、「漢方薬を処方して送ってほしい」とのリクエストがありました。

Y医師によると、マイケルは治療中もサービス精神旺盛で、「奥さんはいるの？」「お子さんは？」と尋ねては、持参したペプシのカード一枚一枚にサインを書き、プレゼントしてくれたそうです。また、Y医師の奥さんが「Ben」のレコードを持っていると知ると、「今では手に入りにくいんだよね。サインするから持ってきて」と言って、そのジャケットにも、やはりサインをしたとのことでした。

なお、Y医師のクリニックには、ポラロイドで撮影されたマイケルとY医師の写真が飾ってあります。マイケルが自分でポラロイドを構え、「写真を撮りましょう。クリニックに飾ってもいいですよ」と、サインをしながら言ったそうです。

Y医師の患者さんで、「写真をクリニックに飾ってもいい」と自ら言ったのは、マ

イケルだけだそうです。また私が知るかぎり、マイケルが自分からそんなことを言い出すのも、非常に珍しいことです。よほどY医師の治療が気に入り、感謝していたのでしょう。

プレゼントだらけのダイニングルーム

鈴木さんは、ビル・ブレイの許可を得て、一度、9歳の姪(めい)をマイケルに会わせたことがあるそうです。彼女から、不二家のペコちゃんの絵がついた赤い小さなプラスチックの鞄をプレゼントされたマイケルは、3日間ほど、外出する時には必ずそれを持ち歩いていました。その姿がテレビのニュースにも流れ、鈴木さんの姪は大喜びしていたそうです。

マイケルが泊まっていたスイートの広いダイニングルームは、ファンからのプレゼントで常にいっぱいで、足の踏み場もないほどでした。しかしマイケルは、それらを一つひとつ開封しては、喜んでいました。またマイケルが帰国してからも、スタッフがホテルに残り、プレゼントを丁寧に梱包(こんぽう)し直して、すべてアメリカのマイケルの自

宅へ送っていました。

一方、マイケルの部屋が、マイケルからのプレゼントでいっぱいになったこともあります。

1988年のマイケルの来日公演は、クリスマスにまたがっていました。アメリカでは、クリスマスは家族だけで祝う習慣があり、家族のための休暇でもあります。ある日、マイケルの部屋へ行くと、当時高価だったソニーのハンディカムが、ずらりと200個ほど並んでいました。「これ、どうしたの?」と訊くと、「みんなへのプレゼントだよ」と答えるのです。

マイケルは、ツアーで家に帰れない出演者とスタッフ全員に、感謝の気持ちを込めてクリスマスプレゼントを贈ったのです!

さらにマイケルは彼らに、クリスマスを楽しく過ごすためのパーティー代まで用意していました。

マイケルと「セガ」

＊　＊　＊

「僕はセガのゲームが好きだから、ここへ来たんだ」――鈴木久司さんとの出会い

初来日の際、おもちゃとゲームが大好きなマイケルが行きたがった場所の一つが、ゲームメーカー、セガの本社ビルでした。

1980年代後半から90年代前半にかけて、動くアーケードゲームが全盛期を迎えていました。セガは次々に新しいゲームを開発しており、アメリカでも「今まで想像できなかったような、新しいことをやる、かっこいい会社」というイメージが強かったようです。そんなセガのクリエイティビティに、マイケルは強く惹かれていたのでしょう。さっそくアポイントをとり、訪問したのですが、その時に応対してくれたのが、鈴木久司さんでした。鈴木さんは当時、セガの常務取締役であり、開発部門の責任者でもありました。

©SEGA

セガ本社にて撮影
鈴木久司氏からゲームの説明を聞く

Memories of Michael Jackson

鈴木さんは、「僕はセガのゲームが好きだから、ここへ来たんだ」と挨拶したマイケルに、「僕は、君のことはもちろん知っていたけど、君の音楽を聴いたことがなかった。今日、初めて聴いてみたけど、なかなかいいね」と、さらりと言ってのけました。また、それからもしばしば「特にファンじゃないから、サインなんか要らない」と言っていました。そのように接してくれる人が、周りにいなかったからでしょうか。マイケルと鈴木さんはすっかり打ち解け、良き話し相手になったのでした。

なお鈴木さんは、後にマイケルからサイン入りのジャケットをプレゼントされたのですが、「自分だけのものにするわけにはいかない」との思いから、自宅には持ち帰りませんでした。そのジャケットは、鈴木さんが退職した今も、セガの本社ビルに保管されているそうです。

最先端技術に大興奮

初めてセガを訪れた日、鈴木さんは、社外の人間が本来立ち入ることのできない開発室にマイケルや私たちを案内し、開発中のゲームについて、丁寧に説明してくれました。

マイケルは特に、「アウトラン」というゲームに興味をひかれていました。それは「世界中のきれいな景色の中を、スポーツカーに乗って走り回る」という内容で、BGMが3曲入っており、好きなものを選べるようになっていました。

そのBGMがすっかり気に入ったマイケルは、すぐにメロディを覚えて口ずさみ、「誰がこの曲を作ったの?」と鈴木さんに尋ねました。鈴木さんが「セガのサウンドスタッフだよ」と答えると、「これは素晴らしい曲だ。ぜひそのスタッフに会わせてほしい」と言うのです。

サウンドルームに案内されたマイケルは、今度は普段使っているスタジオとの違いに興味をひかれたらしく、「こういうスタジオもあるのか」と非常に喜んでいました。

セガのサウンドルームには楽器は一つもなく、みんなヘッドホンをしたままコンピューターに向かって、黙々と入力作業をしていました。そんな状況で音楽を作るなんて、彼には信じられなかったのでしょう。

セガ本社を訪れたマイケルは、商品化されたゲームのはるか先を行く、映像などの先端技術を見ては「僕はゲームのことをよく知っているつもりだったけど、今、技術はこんなところまで進んでいるのか」と驚いていました。

マイケルは口癖のように「サムシング・ニューが必要だ」「常に新しいことをやって、ファンを喜ばせたい」「人と同じことはしたくない」と言っていました。そんなマイケルにとって、セガは、宝の山のように思えたのでしょう。それからは来日の度に、必ず一度はセガへ足を運んでいました。

なおセガは、1990年に、マイケルとの初コラボレーション作品「ムーンウォーカー」のアーケードゲーム版とメガドライブ版（家庭用ゲーム）を作りました。この時、鈴木さんは担当者に「覚悟しろよ。ただライセンスをもらって、マイケルの名前を使って、ありきたりなゲームを作ったって、彼は納得しないから。彼は絶対、『ゲ

セガの開発室にて撮影
鈴木久司氏と「ＡＳ-1」を初体験

Memories of Michael Jackson

ームの中に、今までのゲームにない要素が入っているかどうか』にこだわるから」と言ったそうです。

「僕はギャラは要らないよ」

１９９２年12月、「DANGEROUS」ツアーで来日した際も、マイケルと私たちは、セガの本社ビルを訪れ、新しいゲームをいくつか体験させてもらいました。その中で、特にマイケルが興味を示したのが、モーションライド・シミュレーター「AS-1」でした。

AS-1は、ロケットのような形をした8人乗りのアトラクションで、コックピットの中に入ると目の前の画面が動き、それに合わせてコックピットも揺れるため、実際に移動しているような気分になるというものです。

その時AS-1に入っていたのは「スクランブル・トレーニング」というソフトでした。「宇宙空間で押し寄せてくる敵を銃で撃ち、一番多く倒せた人が、地球に戻ってきた時のパイロットになれる。パイロットには操縦の権利が与えられる」という内容で、

パイロットがランディングに失敗すると、筐体がガタガタと揺れます。ただ乗っているだけではなく、参加型であるところが、マイケルの気に入ったようでした。みんなで何回かやったのですが、必ずマイケルが一番多くの敵を倒し、パイロットになっていました。

帰国してからも、マイケルが熱心に友人たちに勧めたらしく、ポール・マッカートニーをはじめ、何人ものエンタテイナーたちからAS-1に乗りたい、と連絡がありました。私はその度にセガに連絡し、アテンドをお願いしました。

1993年3月2日、私の事務所に、マイケルから電話がかかってきました。電話の向こうでマイケルは「AS-1は、今までのアーケードゲームの中で、ベストだと思う。僕はぜひ、あのゲームを成功させたい」「プレーヤーがスピードのコントロールもできたら、より深く参加することができて完璧なのに」と言っていました。また、AS-1に触発されて、新しいゲームの構想も浮かんでいたようです。

「360度の大型スクリーンのアーケードゲームが作りたい」

「3Dサウンドで、場面に合わせて座席が動くようにしたいな」

「暴力的なものじゃなく、楽しく学べるゲームにしよう」
「タイムスリップものがいいかもしれない。プレーヤーが、移動する時代や地域が選べて、その時代を生きているような体験ができるゲームがいい」
「ただ歴史の勉強をするだけじゃなく、火山が爆発したり嵐がきたり恐竜が出てきたり、そういったエキサイトメントも入れないと」
「セラピー効果もほしいなあ」
　電話の向こうのマイケルから次々に飛び出すアイデアを、セガに伝えるため、私は必死でメモをとったものでした。

　AS-1に関するマイケルからの提案の中には「お客さんがよりAS-1を楽しめるよう、各ゲームの最初に、ナビゲーターによるストーリーなどの解説映像を入れたほうがいい」「そのナビゲーター役を、ぜひ自分がやりたい」という驚くべきものもありました。
　私はさっそくセガに伝えたのですが、セガ内部では当然、「マイケルに頼んだら、相当高額なギャラが発生するはずだ。不可能に近い」という声が上がったそうです。
　しかしそれに対し、マイケルは自ら「僕はギャラは要らないよ。撮影に必要な実費だ

け負担してもらえればいいから」と表明したのです。実際、マイケルサイドがセガに請求したのは、スタジオ代や照明代、撮影スタッフの賃金等のコスト、約5万ドルだけでした。ちなみにマイケルが「キャプテンEO」に出演した時には、ギャラを含め7000万ドルものコストがかかったそうです。

こうしてマイケルは、スクランブル・トレーニングと「メガロポリス2154」、二つのソフトの映像に出演することになり、1993年2月下旬に撮影が行われました。メガロポリス2154の撮影には私も同行したのですが、待ち時間が多かったにもかかわらず、マイケルは文句を言うこともなく、じっと待っていました。おそらく「自分がやりたいと言い出したことを、みんなが一生懸命形にしてくれているんだ」と思っていたのでしょう。その気持ちが伝わったせいか、スタッフも「マイケルをあまり待たせないように、段取りよく進めよう」と頑張っていました。

なお、世界のスーパースター、マイケル・ジャクソンが出演しているにもかかわらず、鈴木さんが特にそれを、宣伝に利用することはありませんでした。私は内心「もっと宣伝すればいいのに」と思っていたのですが、鈴木さんには「世界一のゲームを

作っているんだから、それで十分だ」という考えがあったのでしょう。
そして、鈴木さんがそういった人だからこそ、マイケルと共感しあえたのかもしれません。

今、明かされる真実——荷宮尚樹さんたちの奮闘

やはり1993年のことですが、マイケルは、ゲーム音楽の作曲も手がけています。ある時、鈴木さんがマイケルとゲームについて話すなかで、「今、企画中のアドベンチャーゲームには、いろいろなシーンがあって、それぞれに音楽が入るんだ。マイケル、その音楽を作ってみる？」と尋ねました。
ここでも鈴木さんは、「君がやりたいなら、作らせてあげるよ」という姿勢を貫いていたのですが、そばで聞いていた私は、彼は一体、何を言い出すのかしらと驚きました。しかし、もっと驚いたことに、マイケルは「やってみたい」と答えたのです。
鈴木さんが「開発に費用がかかるから、あなたにとってビジネスにはならないよ。ただ、もしこのプロジェクトが成功したら、何らかの形で君に報いるよ」と話したと

セガ本社にて撮影
開発室で新しいゲームを試す

ころ、マイケルはこう言いました。「僕には何もしてくれなくていいよ。僕はやりたくてやるんだから。その代わり、もしそのゲームがヒットして利益が出たら、その中の何パーセントでもいいから、僕の名前で、世の中の貧しい子どもたちに寄付をしてほしい」。

なお、鈴木さんはマイケルに「このゲームシリーズはすごいんだぞ。600万枚くらい売れるんだからな」とも言ったのですが、普段はあまり自慢めいたことは口にしないマイケルが、この時ばかりは「僕の『Thriller』は、7000万枚売れたよ」と、小声で呟いていました（ちなみに、「Thriller」はアルバム売上げの世界記録を更新しています）。

マイケルに作曲を頼むことが決定すると、鈴木さんはまず、ゲームのシーンを言葉で説明しました。しかしマイケルは「想像がつかない」と言うばかり。そこで、絵コンテによる説明に切り替えた途端、マイケルの中に、すごい勢いでイメージがわきはじめたのが、傍（はた）で見ていてもよくわかりました。鈴木さんはつくづく「彼の想像力をかきたてるには、言葉ではなく、ビジュアルじゃなきゃだめなんだな」と思ったそう

です。

ちなみに、ある時、マイケルを訪ねて、鈴木さんとロサンゼルスの録音スタジオに行ったことがあります。そのスタジオの事務所は雨漏りがひどく、鈴木さんはマイケルに「どうしてこんなところでレコーディングするんだ？　ニューヨークにでも行けば、もっといいスタジオはあるだろう」と尋ねました。するとマイケルは「確かにニューヨークのスタジオはいいけれど、音が硬くなってしまう。ここのほうが、音が柔らかくていいんだ」と答えたのです。

マイケルの、音へのこだわりが垣間見えるエピソードです。

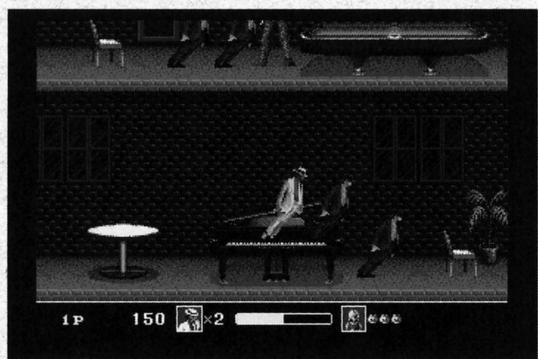
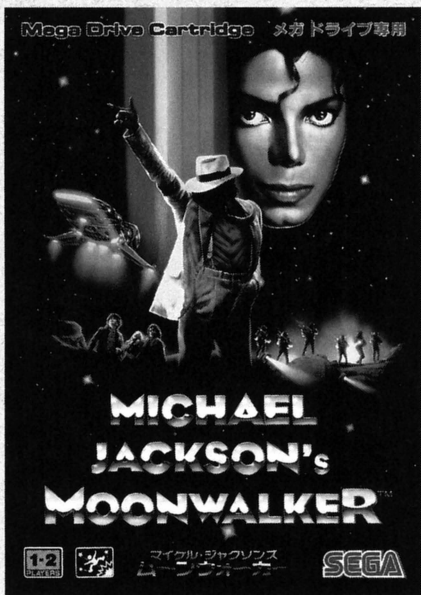
実際に音楽の制作が始まると、鈴木さんは、セガのサウンドチームを、コンピューターや機材と一緒に、ロサンゼルスのホテルに送り込みました。

この時、サウンドチームに同行したのが、バイリンガルのコーディネーター、荷宮（にみや）尚樹（ひさき）さんです。

ちなみに、荷宮さんはAS-1の映像撮影の際も、セガのクリエイティブスタッフと

現場のスタッフとの調整役をしていました。マイケルとの仕事が決まった時、荷宮さんが鈴木さんに「マイケルってどんな人なんですか？」と尋ねると、鈴木さんは「いいヤツ。いいヤツとしか言いようがないよ」と答えたそうです。

さて、ロサンゼルスに着いた荷宮さんたちを待っていたのは、「昼間にスタジオで録音された原音を、夜、ゲーム用音楽に変換し、翌日、それをスタジオに持っていってマイケルたちに聴かせ、感想や修正の要望などをもらって帰る」という繰り返しの日々でした。ロサンゼルス滞在中のやりとりはもっぱら、マイケルの音楽監督であるブラッド・バクサーとの間で行われました。

なお、荷宮さんたちは一度、ブラッドから「マイケルの作曲現場を見せてあげるよ」と言われ、スタジオを見学したことがあるそうです。そこでは、「マイケルが音楽的なアイデアやメロディーを口ずさみながらブラッドに伝え、ブラッドがキーボードでコード（和音）弾き、楽譜にする」という形で、作曲が進んでいました。マイケルはブラッドに、全幅の信頼を置いていたようです。

©SEGA

セガのゲームソフト「ムーンウォーカー」

「代わりに新しい曲を作るから」

当初は「1週間くらいでめどがつくのではないか」と思っていた荷宮さんたちでしたが、ロサンゼルスの滞在期間は、どんどん延びていきました。

原因は、音楽に対する、マイケルたちの要求の高さです。

ゲームはデジタルですから、1秒に数十コマの間隔で、正確にビートが刻まれていきます。その間隔を少しずらすことで、グルーヴ感が生まれるのですが、マイケルとブラッドは、そのずらし方に非常にこだわっていました。「ここにもう少し、ためがほしい。マイケルの音楽にはもっと、グルーヴが必要だ」「しかしこれ以上感覚をずらすと、今度はビートがずれてしまう」といったせめぎあいが続き、荷宮さんたちは徐々に「マイケル・サイドが納得するまで帰れない」という気持ちになっていきました。

また当時は、メモリーチップの容量に限界があり、音質の低下は避けられませんでした。

初めてゲーム用に変換した音楽を聴いた時、マイケルは非常にがっかりしていたらしく、一時は「音質が悪すぎて、マイケルの音楽として出すことはできない」とブラッドに言われたそうです。しかし荷宮さんたちは「マイケルのファン全員が、ステレオでマイケルの音楽を聴いているわけではない。テレビでマイケルのビデオクリップを観、ラジオでマイケルの曲を聴き、それでも楽しんでいるファンもいる。ゲーム音楽には制約があるけれども、その中でマイケルのスピリッツが伝わるようにしましょう」と説得し、最終的には「テレビで聴くゲーム機の音質としては最高のレベル」に目標を定め、作業を進めることになりました。

結局、荷宮さんたちは、当初の予定より2週間長く、ロサンゼルスに滞在しました。しかし、小さな課題がいくつか残っていたため、帰国後も作業を続けることになりました。

そして1993年9月上旬、福岡ドームでの公演のために来日したマイケルに最終の許可をもらうべく、荷宮さんとセガのサウンドチームは、再び機材をひっさげて、九州へ飛んだのです。

その時のやりとりは、私もそばで聞いていたのですが、マイケルは荷宮さんたちに「同じシリーズの、過去のゲームのほうが音がいいのは何故？」と尋ねていました。荷宮さんが「過去のものより、ゲームの内容がずっと面白くなっています。その分、音楽に割り当てられるメモリーが少なくなっているんです」と答えると、マイケルはなんと、「わかった。じゃあ、このトラックははずして。代わりに新しい曲を作るから」と言いました！　限界がわかってもあきらめず、より良くするための工夫と努力を惜しまない。それがマイケルなのです。

クリスマスに発売することを考えると、スケジュール的にはギリギリだったのですが、荷宮さんたちは何とか、マイケルが九州に滞在している間に、ＯＫをもらうことができました。そして、ＯＫが出た翌日。マイケルの好意で、セガのスタッフは全員、コンサートの2日目に招待されたのです。

大変な思いをした荷宮さんたちですが、マイケルに対して嫌な感情を抱いたことは一度もなく、納得して仕事ができたそうです。マイケルたちが何でもストレートに言ってくれるため、率直に意見をぶつけあうことができたからでした。また、マイケル

は荷宮さんたちに対し、常に優しい口調で「もう少し頑張って」「もう少し良くならない？」とお願いするばかりで、「全然ダメだ」「音楽をわかっていない」などと不遜なことを言ったり、頭ごなしに命令したりすることは、一度もなかったそうです。
その背景には、マイケルの生い立ちが関係していたのでしょう。マイケルは荷宮さんに「ジャクソン5の頃、いつも頭ごなしに叱られながら仕事をしていた。だから僕は、そんなことはしたくない。ただ、みんながプロとして最高の仕事をしてくれることを期待している」と言ったことがあるそうです。
さらに、「どんな人とでも仕事をすることができる自信」が得られたのも、荷宮さんにとっては大きな収穫でした。「世界一のクリエイター」であるマイケルとの仕事を通して、荷宮さんは、「お互いをプロとして認めあったうえで、意見を闘わせ、より高い結果を導き出す」ことの大切さを、あらためて確認したそうです。

「大丈夫？　寒くない？」

日本ではあまり知られていないのですが、マイケルは１９９７年、短編映画

「GHOSTS」を発表しました。監督は、「ターミネーター」や「エイリアン2」など、特殊効果と特殊メイクでアカデミー賞を4度受賞した、スタン・ウィンストンでした。
この映画の製作にあたり、マイケルから「『GHOSTS』をそのまま、セガでゲーム化してほしい」との提案がありました。
結局そのプロジェクトは実現しなかったのですが、荷宮さんと私は一度、ロサンゼルスの「GHOSTS」の撮影現場にお邪魔したことがあります。1994年10月27日の夜のことでした。

私たちがスタジオを訪ねた時は、リハーサルの最中だったのですが、一人の老紳士が近づいてきました。ビル・ブレイから「この方が、今回の市長です」と紹介された荷宮さんは、てっきり市長役の役者さんだと思い、彼と握手をしました。しかし、実はそれはマイケルだったのです。
「GHOSTS」の中でマイケルは、指揮者、市長、2種類のゴースト（幽霊）と骸骨の5役を演じていました。ぽかんとする荷宮さんを見て、マイケルが喜んだのは言うまでもありません。

また、撮影の合間に、マイケルと荷宮さんは、スタジオの2階に行きました。そこには、スタン・ウィンストンが受賞した数々のトロフィーが飾られていました。

荷宮さんがそれらを眺めていると、マイケルが突然「オスカーを持ったことがある?」と尋ねてきました。「ノー!」と答えた荷宮さんに、マイケルは「では、オスカー像をどうぞ!」と言って、トロフィーを一本手渡しました。そこには「ターミネーター2」と書かれていたそうです。

さらにマイケルは、2002年に発売された、セガのアクションゲーム「スペースチャンネル5 パート2」にも出演しています。

実は、1999年に発売された「スペースチャンネル5」にもゲスト的に出ているのですが、その時は十分な準備期間がとれなかったため、マイケルのたっての希望で、「パート2」に出演することとなったのでした。

スペースチャンネル5は、宇宙のテレビ局を舞台としたゲームで、マイケルはその局長の役です。モーションキャプチャーを基に作られた映像が使用され、ゲーム内には、マイケル局長が踊りを披露するシーンも登場します。

このゲームの撮影は、１９９６年12月、セガ本社ビルのスタジオで行われました。寒い時期だったにもかかわらず、たくさんの機材や人の熱により、スタジオ内がすっかり暑くなってしまったため、窓を開けることになりました。マイケルは、音が大きくないと踊れないため、かなりの音量で音楽をかけていたのですが、クレームは特に来なかったそうです。その頃には、セガがマイケルと仕事をしていることが知れ渡っていたせいかもしれません。

また、その時は完全にお忍びで来ていたにもかかわらず、キャピトル東急からついて来たファンの子たちが20人くらいいて、窓の下に立っていました。マイケルは、そこでも彼女たちに気を遣い、「大丈夫？　寒くない？」と声をかけていました。

はかなく散った夢

マイケルには、大きな夢がありました。

「テーマパークを作りたい」という夢です。

前にも書いたように、マイケルはビジネスのアイデアが浮かぶと、私の家に電話をかけてきたのですが、テーマパークについても、

「僕はディズニーランドをよく知っているけど、あそこよりもさらに良いものを作りたい」

「セガとなら、次のステージに行ける気がするんだ」

「革命を起こしたい」

と語っていました。

セガとは、プロジェクト単位で仕事をするだけでなく、セガの事業全般にアドバイザーとして関わりたいと思っていたらしく、セガの株を買うことまで考えていたようです。

また、それとは別に、マイケルのプロデュースによる「テーマレストラン」プロジェクトも進んでいました。

シンガポールのグループ企業、ホテル・プロパティーズ社（当時、「フォーシーズンズ」など14のホテルや、「ハードロックカフェ」「プラネットハリウッド」などのア

ジアでのフランチャイズの権利を所有）から、ロンドンのピカデリーサーカスにある、同社所有の店舗に、「マイケルのグッズを置くコーナーを作りたい」と打診されたのが、そもそものきっかけでした。同社はさらに、ロンドンや東京、ラスベガスなどにテーマレストラン「ワールド・オブ・マイケル・ジャクソン」を出店するつもりだったようです。

そこでマイケルが、セガに「一緒にテーマレストランを作りたい」と提案したのです。

マイケルのアイデアは、次のようなものでした。

レストランは、いくつかの個室に分かれていて、それぞれに「スムース・クリミナル」「ビート・イット」「ビリー・ジーン」「スピード・デーモン」といった名前がついており、BGMが流れています。

テーブルの上にはコンピューターースクリーンがあり、メニューはそこに映し出されます。また、オーダーが終われば、料理を待っている間に、店内の別の部屋の人たちと対戦ゲームができるのです。また、お店ではもちろん、お土産を買うこともできま

す。

しかし、さまざまな事情から、その事業は実現しませんでした。

一方、1994年頃から、徐々にマイケルと、サウジアラビアの億万長者、アル・ワリード・ビン・タラール王子との関係が深まっていき、1996年3月に、二人は共同で新会社「キングダム・エンタテイメント」を立ち上げると発表しました。その事業内容は、マイケルが、家族向けのコンサートや映画、テレビ番組、そしてテーマパークとホテルをプロデュースする、というものでした。

それ以来、アル・ワリード・ビン・タラール王子サイドのガードが非常に固くなり、私たちはマイケルに会うこともままならなくなりました。なお、マイケルと王子とのジョイントベンチャー事業も、後に解消されてしまったようです。

東京ジョイポリスを訪問

1996年12月19日と1998年7月28日に、マイケルは、鈴木久司さんたちに案内されて、セガが運営するアミューズメントテーマパーク「東京ジョイポリス」を訪

れています。ここでもマイケルは「ハーフパイプキャニオン」など、特に動きの激しいアトラクションを楽しんでいました。

また両日ともに開館時間中だったため、マイケルを一目見ようとお客さんが集まってきたのですが、マイケルはいつものように気軽に手を振り、1996年には3階の「セガソニック&テイルス」コーナーの壁に、1998年には5階のアトラクション「ホラーライド」の柱にサインを残していきました。

しかし、実はそれ以外の日の営業時間後にも、マイケルは何度か、スタッフや子どもたちとともに、東京ジョイポリスを訪れています。

そのうちの一回は、当時、私たちの会社で働いていた竹村美香子さんも同行しました。

彼女は、子どもの頃は「MTV」で観るマイケルのダンスに憧れていたものの、スーパースターとなり、スキャンダラスなゴシップが目立つようになってからのマイケルには、あまり良い印象を抱いていませんでした。私は彼女にも「HIStory」ツアーのVIPチケットをプレゼントしたのですが、コンサートやパフォーマンスの素晴ら

しさは認めながらも、マイケルが感極まってステージで泣いた時には「ただの芝居だろう」と思い、しらけてしまったそうです。
　ところが、東京ジョイポリスで子どもたちと一緒に楽しそうに遊んだ後、スタッフ全員に「ありがとう。さようなら」と言って帰っていくマイケルの姿を見ているうちに、竹村さんは何とも言い難い感動を覚え、目には自然と涙が浮かんできました。彼女が「私はマイケルを崇拝しているわけでも、アーティストとして好きなわけでもないのに、何なのよ、この泣き出したい気持ちは？」と思って部屋を見渡すと、そこにいたスタッフや、スーツ姿のセガの社員のほとんどが、やはり戸惑い、「一体私はどうしてしまったの？」と互いに言いあいながら、泣いていました。50人もの「大のオトナ」を泣かせてしまう、マイケルの存在感やオーラ、パワーを目の当たりにして、彼女の、マイケルに対する見方は、変わらざるを得なかったそうです。

マイケルお気に入りのシェフたち

＊　＊　＊

マイケルの、困った食生活――高谷敏雄さんたちが専属シェフに

マイケルは、食べることにあまり興味がありませんでした。
飲み物はたいてい、オレンジジュースかミルクかエビアン。
食事は少ししか食べないくせに、ジャンクフードやスナック菓子が大好き。
いつもガムを噛んでいて、時にはそれを破裂させたり……。その辺はあまり、行儀がいいとは言えませんでした。
また、基本的にはベジタリアンでしたが、時々はフライドチキン、ポテトなど、カラッと揚げたもの、子どもが好きそうな食べ物も食べていました。
しかもマイケルは、コンサートが始まると神経が高ぶり、さらに食が細くなってしまうのです。

ホテルにて撮影
シェフの高谷敏雄氏と

Michael's Special Menu

1987年来日時の
マイケル食事メニュー

10/16

Lunch

マッシュポテト
（シシトウとニンジンのソテー）
コーンチップと
　ビーンペーストのピザ
バターコーン
トルティーヤ
ケチャップライス
スイカ
メロン
餅の磯辺焼き
豆乳
オレンジジュース
ポップコーン
味噌汁

Dinner

ポテトグラタン
豆腐と野菜の炒め物
キノコの炒め物
野菜のチリソース煮
豆腐ハンバーグ
アボカドライス
ニンジンとキュウリの甘酢和え
サツマイモのハチミツソース煮
オレンジジュース
スイカ

10/17

Lunch

チーズトースト
ピザ
スティックサラダ
サツマイモのハチミツソース煮
スイカ
オレンジジュース
豆乳
バターライス
ポップコーン

Dinner

バターライス
バターコーン
おはぎ
野菜のゴマ酢和え
豆腐ハンバーグ
パパイヤジュース
スイカ
オレンジジュース

10/18

Lunch

野菜サンド
バターライス
味噌汁
トルティア（コーンチーズ）
小豆寒天
スイカ
オレンジジュース

Dinner

トルティア（グァカモレソース）
チーズトースト
トルティアピザ
ちらし寿司
アボカドとソースの寿司
味噌汁
オレンジジュース
スイカ

マイケルの食の細さは、いつもビル・ブレイをやきもきさせていました。「こんな食生活では、とてもハードなコンサートツアーを乗り切れない」と心配したビルは、初来日の際、アメリカから女性のシェフを同行させていました。しかし彼女は仕事よりも遊ぶことに夢中で、生野菜のサラダなど、簡単な料理しか作ろうとしなかったのです。

困り果てたビルは「豆腐などを使った日本食なら、ベジタリアンのマイケルにも食べられるし、栄養もしっかり摂れるのではないだろうか」と考え、私に「良いシェフを紹介してほしい」と頼んできました。

そこで、私の会社の営業部長に相談してみたところ、「葉山ホテル音羽ノ森」の與田晃久(よだあきひさ)オーナーの耳に入り、二人のシェフが来てくれることになったのです。一人は、もともとフランス料理のシェフだったという高谷敏雄(たかやとしお)さん、そしてもう一人は、日本食のシェフだったという三條 進(さんじょうすすむ)さん。当時は二人とも、葉山ホテル音羽ノ森系列の焼鳥店「音羽亭」で働いていました。

1987年9月16日、「BAD」ツアーの西宮球場公演のため、マイケルたちととも

に大阪のヒルトンホテルに泊まっていた私のところへ、東京から高谷さんと三條さんが面接にやってきました。
急なことだったのでほかにあてがなく、「断られたらどうしよう」と思っていた私は、簡単な質問を二、三しただけで、その日から仕事に入っていただくよう、お願いしました。しかし、会社の顔を立てるため、面接だけ受けてすぐに東京へ帰るつもりだった二人は、「何も持ってきていないのに、どうしよう」と大変戸惑ったそうです。
それでも二人とも、着替えを送ってもらうよう、ご自宅に電話をしてくれました。高谷さんは奥様に「マイケル・ジャクソンの食事を作るだなんて、何言ってるの？嘘でしょ？」と言われたそうです。

さっそく、マイケルの食事内容をチェックした二人は驚きました。アメリカから来たシェフが、コンサートが終わって帰ってきたマイケルに、半分に切っただけのスイカと、トルティーヤにチーズを挟んだもの、そしてトマトスープの3品しか出していなかったからです。しかも、トマトスープを試しに飲んでみたところ、とてもまずかったそうです。

「前のシェフが素晴らしい料理を作っていたら、とても対応できない」と心配していた二人ですが、その瞬間、「俺たちには、もっとまともなものが出せる」と思ったのでした。

マイケルのシェフになった日から、高谷さんたちは、食事から飲み物、ビタミン剤に至るまで、マイケルの口に入るものすべての管理を任されることになりました。二人の部屋には、マイケルの食事の材料にするための豆類が運び込まれ、その種類の豊富さと量の多さに驚いたそうです。

また、マイケルはコンサートの合間合間に、スペシャルドリンクを飲むのですが、ビルがアメリカから持ってきた原液をお湯で割って水筒に入れ、ステージ袖で渡すのも、二人の役目でした。仕事を引き受けた時には、まさかそんな場所にまで連れていかれるとは思っていなかったため、やはり最初は驚いたそうです。

そして毎回、ステージが終わる前にホテルへ戻り、夕食の支度を始めるのでした。

ステージではパワフルなマイケルですが、コンサートが終わるとぐったりしていま

した。そんなマイケルに、二人はやはり、スイカを出していたそうです。ただし、皮を剝いて種をとり、フォークで一口で食べられるようにして。もしかしたらマイケルは、コンサートで失った水分とカロリーを、大量のスイカで補っていたのかもしれません。

「食事をする間、ここにいて」

少食なマイケルに、できるだけ多く食べてもらうため、高谷さんたちは出す料理の品数を増やすことにしました。

マイケルは、嫌いなものでさえなければ、出された料理は、必ずスプーンで一口ずつは食べるからです。

初めて二人が料理を作った日、マイケルはテーブルいっぱいに並べられた皿を見て、「こんなにたくさん料理が来て、まるでパーティーみたいだ」と喜びました。

この時高谷さんは、静かに穏やかに話す、実年齢よりもはるかに幼く見えるマイケルを見て、「この子を何とかしてあげないと」と思ったのでした。一方でマイケルも、

白いユニフォームを着た高谷さんたちに対し、「プロの料理人が来てくれて、自分のために頑張ってくれる」という信頼感を持ったのでしょう。

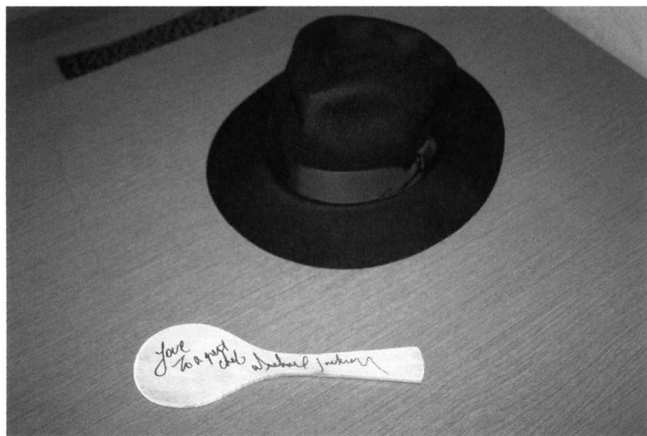
普段はあまり、人に食事をする姿を見せたがらないマイケルですが、高谷さんたちには初日から、「食事をする間、ここにいて」と頼み、一品一品の料理について「これは何？　これは何？」と訊いていったそうです。マイケルにとって「相手を信頼できるかどうか」は、とにかく大切なポイントだったのです。

また、食事中のマイケルが、高谷さんたちに「何か歌って」とお願いしたこともありました。彼らが「夕焼小焼」を歌うと、大喜びで聴いていたそうです。

最初のうちは手探り状態だった高谷さんたちですが、何日か経つうちに、少しずつマイケルの食べ物の好みがわかってきました。

嫌いなものは、マカロニを含むパスタ類、ナス、インド料理、バナナ。「バナナは僕が食べるものじゃない。バブルスのものだ」とマイケルは言っていたそうです。

味噌汁は、豆腐だけすくって食べていました。

一方、好物はあまりなかったのですが、スティックサラダにつける味噌には興味津々

Love, To a great chef　素晴しいシェフに愛を込めて
高谷氏がマイケルからもらった帽子

To Takaya Love Michael Jackson
高谷氏の上着にサイン

だったようです。
特に「作ってほしい」とリクエストがあったのは、グァカモレソース（アボカドソース）。その存在を知らなかった高谷さんは、本で調べて作ったのでした。
なお、高谷さんと三條さんは、しばしば「これはマイケル、手をつけるかなあ」と思うようなものを実験的に作っては、「食べた！」「やっぱりダメだった！」などと、お互いに言いあっていたそうです。

「偉大なるシェフに、愛を込めて」

高谷さんたちは、1987年と1988年の来日公演の際にマイケルの食事を作ったのですが、その間に、マイケルの生活習慣に、ちょっとした変化がありました。1987年に毎週行っていた日曜日の断食を、翌年にはやめてしまっていたのです。
そうとも知らず、日曜日の夜、「今日は休みだ」と油断して飲んで帰ってきた高谷さんは、突然マイケルに「何か作ってほしい」と言われ、あわてたそうです。その時ばかりは、お酒の匂いに気づかれないよう、マイケルの部屋には入らず、ドアからそ

っと、食事を差し入れたのでした。
また、夜中に突然電話がかかってきて、「お腹空いたから何か作ってほしい」というリクエストが来ることもありました。高谷さんが寝ぼけ声で電話に出たため、マイケルは心配して「眠いの？　大丈夫？」と言ったそうです。ちなみに、夜食にはポップコーンを頼まれることが多かったようです。

高谷さんたちは、マイケルのいたずらの、かっこうの標的でもありました。
中にサソリのおもちゃが入っていたり、触るとビリビリッと刺激が走ったりするびっくり箱で驚かされるのは、日常茶飯事。マイケルがあまりにも「今日はこれでびっくりさせてやろう」といった表情で箱を差し出すので、毎回「絶対に怪しい」と思いつつも、「いいから、この箱に触ってみてよ」というマイケルについ根負けしてしまい、案の定びっくりさせられて、マイケルを喜ばせることになるのでした。
また、マイケルからホテルの内線電話で「窓から外を見てみて」と連絡が入り、窓際に立った途端、顔にレーザーの光を照射され、驚いたこともありました。そのホテルはL字型になっていたため、マイケルの部屋から高谷さんたちの部屋が丸見えだっ

たのです。マイケルの部屋のほうからは、嬉しそうな笑い声が聞こえてきたそうです。

こうして、すっかりマイケルに気に入られた高谷さんたちに対し、ビルからは「1987年の来日公演が終わった後、ヨーロッパのツアーについてきてほしい」との打診がありました。しかし、ヨーロッパでうまく食材を探せるか自信がなく、「万が一、前のシェフのようにクビになったら……」という心配もあって、二人は辞退しました。なお高谷さんは、マイケルから、ツアーの記念品である帽子をプレゼントされたそうです。

また、ホテルの人にマイケルのサインを頼まれ、色紙を袋に入れてマイケルに渡したことがありました。高谷さんはたまたま、その袋の中にしゃもじを入れっぱなしにしていたのですが、後日、サイン色紙とともに、「Love, To a great chef」という文字とサインが書かれたしゃもじが戻ってきたそうです。

ところで、マイケルと私たちは1987年10月15日、縁あって神奈川県にある日産の追浜(おっぱま)工場を見学したのですが、その際、葉山ホテル音羽ノ森に立ち寄りました。こ

のホテルはその年にオープンしたばかりで、私たちはランチに招待されたのです。
そこで私たちは、3～4時間ゆっくりと過ごし、二人の有能なシェフを快く派遣してくれたオーナーの與田夫妻に、お礼の言葉を伝えました。與田オーナーは、マイケルの優しい目と柔らかな手の感触を、今もよく覚えているそうです。
なお、この日のメニューは、高谷さんが料理長にマイケルの食べ物の好みを伝え、それを基に考えられたものでした。
後日、マイケルはランチのお礼に、與田夫妻を公演のＶＩＰ席に招待しました。また、アメリカに帰国してからも、與田氏にお礼の手紙を出しています。このマイケルの手紙は、葉山ホテル音羽ノ森のホームページに掲載されています。

マイケル、それは何の歌？

What are you singing ?

風の歌だよ

Wind

3
マイケルの光と影
The light and the dark sides of Michael

スーパースターの休日

＊　＊　＊

「日本の歌を歌って」

来日中、コンサートがない日は、練習時間以外は、マイケルにとってのオフタイムでした。そのスケジュールは、ビルがすべて管理していました。

そうしたオフタイムに、みんなで連れ立って出かけることも、しばしばありました。ビルの許可の下、外出できるのは、マイケルにとっては非常に嬉しいことらしく、車の中でも決して寝たりはしません。持ち前の好奇心を発揮し、窓から外を見ては、ちょっと気になることがあると、私たちに「あれは何？」と質問してきました。ジュースなどの自動販売機が街中にたくさん立っているのを見て、「アメリカだと、すぐに壊されちゃうね」と言っていたのを覚えています。

またマイケルは、後部座席に座るのが好きでした。私たちが乗っているバンのドライバーが、追いかけてくるファンの車をまこうと激しい運転をするのを、カーチェイスのように楽しんでいたのです。私は、事故が起こるんじゃないかとひやひやしていました。

車の中で、よく鼻歌を歌っていたマイケルが、一度私に「日本の歌を歌って」とせがんだことがあります。仕方なく私は、「七つの子」や「かえるの合唱」などの童謡を歌ったのですが、そこからいつの間にか、日本語と英語の、動物の鳴き声の違いの話になり、私はマイケルに「日本語ではかえるの鳴き声はこうなのよ」と教え、互いに英語と日本語で、いろいろな動物の鳴き真似をして楽しんだのでした。年が離れているせいか、私はマイケルと話していて、ふと子どもと会話をしているような気分になることがありました。

それにしても当時、今のような携帯型ゲーム機がなくて、本当に良かったと思っています。もしそんなものがあったら、マイケルは車の中でもゲームに夢中で、あまり会話ができなかったでしょうから。

しかし、そんな楽しいオフタイムに、一度だけ残念な出来事がありました。
1988年の来日時のこと。
オフの日に、「広々としたところへ行って、動物と遊ぼう」という計画が持ち上がり、バスをチャーターして、群馬サファリパークへ行くことになったのです。
高谷さんたちにお弁当を作ってもらい、車内でビデオを観たりしながら、バスに揺られること約2時間。ようやく現地に着いたのですが、一体どこから情報が漏れたのか、そこにはおびただしい数の記者たちが待ち構えていました。するとマイケルは、「フェアじゃない」と哀しそうに呟くと、少しだけバスから降りて、すぐに戻ってきてしまいました。そして私たちは、結局そのまま、東京へ帰ることになったのです。
マイケルは、ちょっとしたことでも大袈裟に書くマスコミが、あまり好きではありませんでした。

「初めてあんな車に乗った！」

マイケルは23歳の時、運転免許を取得しました。

カリフォルニアでは、16歳から取得できるのですが、いつもどこへ行くにもビルが運転をしてくれるので、マイケルは免許証など必要ないと思っていました。彼は、DMV（州の陸運局：車両関係を管理する所轄部署）に出かけるのも、筆記と実地試験を受けるのも気が進まなかったのです。すでに大スターだった彼は、そこで人々に注目されるのが嫌だったのですが、母親に執拗に勧められ、仕方なく免許をとったのでした。運転の仕方は、ビルから教えてもらいました。

男の子はたいてい車好きですが、マイケルはさほど車に興味を持っていませんでした。彼はスポーツカーを持っていなかったので、運転したい時はロールスロイスでドライブをしていました。行き先は、彼が知っている、ごく限られた場所で、縦列駐車をしなくてはいけない時はビルに代わってもらっていました。

そんなマイケルが唯一興味を示した車が、盛田英夫さんが所有していた、日産のバンでした。

1987年の来日時、エピック・レコードからソニー・レコードへの移籍を考えて

いたマイケルから、「ソニーの盛田昭夫会長と直に会って話をしたいから、アポイントをとってほしい」というリクエストがありました。普段は子どものように純粋なマイケルですが、ことビジネスに関しては、並外れた判断力や実行力を発揮するのです。

そこで私は、当時、ソニーで社長室秘書をしていた友人に連絡をとり、マイケルを品川の本社へ案内しました。そして後日、マイケルは、盛田家の夕食会に招待されたのです。

当日は、盛田英夫さんが、マイケルをホテルまで迎えに来ました。その時盛田さんが運転していたのが件（くだん）の車で、夕食会から帰るやいなや、マイケルは興奮して、「初めてあんな車に乗った！」「あの車がほしい！」と、車の話ばかりしていました。

マイケルは、盛田さんの車に備えつけられていたアート感覚のステレオ・セットに、特に夢中になっていました。マイケルに頼まれて、私は日産に電話を入れ、まったく同じ仕様の車をアメリカで手配してくれるよう、依頼しました。

その関連で、マイケルは１９８７年10月15日、日産の追浜工場に招かれることになりました。完全にオートメーション化された組み立て過程を見て、マイケルは「まるで芸術だ」と思ったそうです。

工場の人たちは、マイケルのチャリティ活動のために、寄付金を集めてマイケルに手渡してくれました。マイケルはお礼に、白いブルーバードのボンネットにサインをしました。

また、これはマイケルがアメリカに帰っていた時の話ですが、ひどく感動した様子のマイケルから、国際電話がかかってきたことがありました。

その日、マイケルは契約に関する打ち合わせのため、ニューヨークのソニー・ミュージックのオフィスに行ったそうです。そこでお茶とおしぼりを出され、彼はおしぼりの受け皿に、並々ならぬ興味を持ってしまったのでした。

最近、私の家があるナパ・バレー（カリフォルニア）の高級フレンチ・レストランに行くと、おしぼりが出てくるようになりました。外から入ってきて、おしぼりが出るとほっとします。マイケルもきっと、日本の「おもてなし」に魅力を感じたのでしょう。

私はさっそくおしぼり受けを50個購入し、ネバーランドのマイケルの自宅に送りました。

マイケルの新しいペット

１９８７年のマイケルの来日と、「マイケルズ・ペッツ」の日本での発売に先立ち、私たちはマイケルズ・ペッツのコレクションに新しい特別な動物を加えたいと思っていました。そんな折、特別種のモルモットのＰＲをしている団体を見つけたため、さっそく連絡をとりました。

その団体の会長は、日本滞在中のマイケルに会いに来て、金色の毛並みの「ゴールデン・シェルティ」（シェルティ：長毛種のモルモット）を彼にプレゼントしました。会長が言うには、そのモルモットは特別な交配種で、１匹１００万円もするそうです。

マイケルは予想外のプレゼントに大喜びで、大切そうに抱えて、ホテルの自分の部屋に持ち帰りました。

コンサートのために大阪に旅立つ日、マイケルはゴールデン・シェルティを預かってほしいと私に頼みに来ました。ペットは違う場所になかなか適応できないので、旅行させるのは可哀そうだというのです。私はワクワクしながら、シェルティを家に連

キャピトル東急ホテルにて撮影
ゴールデン・シェルティを受けとるマイケル

Memories of Michael Jackson

れて帰りました。
娘たちはこの訪問者に大喜びしました。シェルティはほとんどの時間を籠の中で快適に過ごしていたため、世話も楽でした。
そんなある朝、娘たちの叫び声が私を驚かせました。「マミー、彼女には赤ちゃんが2匹いるわよ」。
私たちはその時初めて、シェルティが雌であることを知りました。2匹の赤ちゃんが、母親を追いかけ回す様子を眺めるのは、とても楽しいものでした。
しかし、マイケルのツアーが終盤にさしかかり、シェルティとの別れが近づくにつれ、娘たちの元気がなくなっていきました。その様子を見ているうちに、ある良からぬ考えが、私の脳裏に浮かびました。「マイケルは、シェルティに子どもがいることを知らないわ。赤ちゃんだけ、家で引き取るのはどうかしら」。
そして私は、母親のシェルティが眠っている間に、赤ちゃんを別の箱に移したのです。
母親のシェルティは、赤ちゃんがいないことに気づくやいなや、叫び出しました。彼女の叫び声はすさまじく、まるで消防車のサイレンのようでした。その声を聞いた

赤ちゃんシェルティも、一斉に泣き始めました。母親のシェルティは、赤ん坊たちの声の方向に向かってすばやく動き回りました。彼らは声で、互いの位置がわかっていました。

その様子を見て、私は何てひどいことをしたのかと、罪悪感にさいなまれました。母親が子どもと引き離されるのがどれほど悲しいことか。まして私がしたことは、マイケルの宝物を盗むことでもあるのです。

私は何事もなかったように、マイケルに赤ちゃんシェルティを見せました。マイケルは予期せぬ出来事に、さらに喜び、さっそくアシスタントを呼んで、動物を国外に連れ出す申請をするよう頼んだのでした。

「今の説明、彼らにもしてあげて」――次原悦子さんの戸惑い

私がマイケルの仕事をしていた10年間に、マイケルは5回、来日公演をしています。

そのうち、1992年12月と1993年9月の「DANGEROUS」ツアー中の何日

かについては、どうしても私の都合がつかず、過去に何度か仕事でご一緒したことのある、PR会社「サニーサイドアップ」の次原悦子(つぎはらえつこ)さんに、アテンドをお願いしました。

次原さんは、仕事などで外国の人に会うと、必ず「『エツコ』って、『レッツゴー』に似てるでしょ？」と説明しているそうです。そうすると、すぐに名前を覚えてもらえるからです。

そして、『エツコ』は『レッツゴー』に似ている」と最初に教えてくれたのが、マイケルだったそうです。

「レッツゴー」はマイケルにとって、とても大事な言葉でした。ショーが始まる時も買い物に行く時も、「レッツゴー」と言うのが、マイケルやビルの合言葉になっていたからです。

そんな次原さんが、戸惑った出来事がありました。

たまたまビル・ブレイがいない時に、大勢で大型玩具店へ買い物に行くことになり

ました。みんなで車に乗って出かけ、大急ぎで買い物をし、いざ引き揚げようとしたところ、店員が、その集団で唯一の日本人だった次原さんに「お会計をお願いします」と言ってきたのです。

いつもはビルが、大量のお金とクレジットカードを束にしてゴムで留めたものを持ち歩き、会計をしていました。マイケルはお金どころか、財布すら持っていなかったのです。

結局、その場は次原さんが立て替え、後でビルから代金を受け取ったのですが、支払いの時は「カードの限度額以内に収まらなかったらどうしよう」と、気が気ではなかったそうです。

またある時、次原さんは、当時珍しかった「温水洗浄便座」の使い方を、マイケルに教えることになりました。

今ほど英語に慣れていなかった次原さんは、「このボタンを押すと、お尻に水が……」と身振り手振りを交えて懸命に説明したのですが、その直訳っぷりと、単語の選び方がおかしかったのか、マイケルはお腹を抱えて大爆笑。さらに「ちょっと待っ

てて」とセキュリティスタッフを何人か呼びに行き、「エッコ、今の説明、彼らにもしてあげて」と言い出す始末。
そこでもう一度同じように話すと、やはりみんなで大笑い。
マイケルは、それがすっかり気に入ってしまったらしく、彼女は延々と説明をさせられたそうです。

「こんなに良くしてもらえるなんて」——上澤昇さんの心遣い

マイケルはディズニーランドが大好きで、東京ディズニーランドにも何度か足を運んでいます。
初めて行ったのは、1987年。その時に案内をしてくださったのが、当時、オリエンタルランドの部長だった、上澤昇（かみさわのぼる）さんでした。
「マイケル・ジャクソンが東京ディズニーランドに行きたがっているのですが、閉園後、貸切にしていただくことはできませんか」という私たちの申し出に、最初は上澤

さんも戸惑ったそうです。ディズニーランドでは毎日閉園後に、翌日の準備を行っているからです。

しかし、何かあった時は、私が全責任を負う覚悟で、再度お願いしたところ、閉園時間を少し早め、マイケルのために開けてもらえることになりました。

閉園後にセキュリティスタッフの方々がゲストクリアをしていったところ、マイケル目当てのお客さんが、トイレの中に隠れていたそうです。

当日、マイケルと私たちは車で裏から構内に入り、メインゲート近くのＶＩＰルームに案内され、まずはそこでコースなどの打ち合わせを行いました。「スタッフのみんなも楽しませてあげたい」というマイケルの希望で、急遽（きゅうきょ）２００人近い大人数での訪問になってしまったため、上澤さんはびっくりしていました。そして私は、無理なお願いを聞いていただいた手前、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

それからワールドバザールへ移動したのですが、ＶＩＰルームからワールドバザールの入口まで、取材陣がズラッと列をなしていました。上澤さんが事前に、「取材は、ワールドバザールの入口までやめてほしい」とアナウンスしていたのです。メイン

ゲートの外には、「マイケルを一目見たい」というファンが、何百人も待っていて、口々に「マイケル」「マイケル」と叫んでいました。

取材陣とファンの多さを見て、上澤さんは「営業時間中だと大変なことになっていたなあ」と思ったそうです。

マイケルと私たちはまず、当時上映していた「キャプテンEO」を観ました。「キャプテンEOに対する、お客さんの評判はどうですか?」というマイケルの質問に、上澤さんが「とてもいいですよ」と答えたところ、マイケルは「良かった。あれは全力でやったんです」と喜び、合計3回もキャプテンEOを観ていました。

その日は上澤さんの案内で、ほぼすべてのアトラクションに乗ることができたのですが、スピードが出る乗り物が大好きなマイケルは、特に「スペース・マウンテン」がお気に入り。終わるとすぐに「もう一度乗りたい」とせがむので、結局6回も乗ることになりました。

また、「マイケルが、エンシノの家に、『ブルーバイユー・レストラン』(アトラクション『カリブの海賊』の中のレストラン)と同じものを作りたがっていた」と知っ

さらにワールドバザールで買い物をすることもできたのです。

アメリカでは、ディズニーランド内にコンドミニアムを持っているマイケルでさえ、「営業時間中に裏口から入る」程度の配慮しかしてもらえなかったそうです。上澤さんをはじめとする、東京ディズニーランドのスタッフのみなさんの心遣いに、マイケルは「こんなに良くしてもらえるなんて」と、非常に感動していました。後日、マイケルから「上澤さんにお礼が言いたい」とリクエストがあり、マイケルの言葉を私がタイプし、サインを入れてお送りしました。

なお上澤さんは、握手をした時のマイケルのしっとりした優しい手の感触と、「恵まれない子どもにハッピーをプレゼントしたい」という言葉を、今でもよく覚えているそうです。

マイケルは1988年と1992年の来日時にも、東京ディズニーランドを訪れて

います。

１９８８年には、上澤さんから「今回は、全体を開けるわけにはいかないので、乗りたいものや入りたい店舗があれば、事前に言ってほしい」とのリクエストがありました。私はマイケルに良かれと思い、「ワールドバザールは閉めてもかまわないので、できるだけ多くの乗り物で遊べるようにしてください」と伝えたのですが、これが大きな間違い。マイケルは、ワールドバザールを楽しみにしていたのでした。ディズニーランドの乗り物自体は、日本もアメリカもあまり変わらないのですが、お店で売っているグッズの数と品質は、日本のほうがはるかに素晴らしいのです。

マイケルがあまりにもがっかりしていたので、上澤さんが気を遣って、一部の店舗を急遽開けてくれました。そして私はまたもや「自分で判断するのではなく、マイケルに訊くなり、マイケルの気持ちをきちんと考えるなりするべきだった」と反省したのでした。マイケルは決して怒ることはないのですが、がっかりするととても悲しい表情になるので、こちらとしては、かえって胸が痛みます。

１９９２年の時は、次原さんにアテンドをお願いしていたため、私は同行しなかったのですが、貸切ではなく、夜、営業時間中に、裏口から各アトラクション内へ入っ

たそうです。
上澤さんが事前に「声を出して騒いではいけない」と注意しておいたため、キャストのみなさんは常に静かに、マイケルを案内してくれました。しかし、マイケルが東京ディズニーランドに到着し、車から降りて裏口へ向かう時だけはさすがに、マイケルを一目見たいというキャストたちが、ずらりと並んでいたそうです。上澤さんによると、彼らはなんとか振り向いてもらおうと、無言で手を振っており、その袖が触れる音が、30メートルほど先まで聞こえたとのことです。

ハウステンボスへの思い

テーマパーク好きのマイケルは、1992年と1993年の来日時には、長崎のハウステンボスも訪れています。
1992年は、12月26日から28日にかけて、ハウステンボス内の迎賓館に宿泊しました。取材陣もおらず、クリスマス直後で園内は空いており、来園者もマイケルに気

づかなかったため、マイケルもセキュリティスタッフも、同行していたマイケルの3人の甥たちも、自由に楽しむことができました。マイケルは、ハーバークルーザーという小型クルーザーの操縦をさせてもらったり、アニメ館でアニメを描いたり、中国雑技団の練習に目を留めたり、それに触発されたのか、珍しく夕食に「中華料理を食べたい」とリクエストしたり、ハウステンボスを満喫していました。

そこで、もっとも彼の関心をひいたのは、噴水に映像を投影させるレビューアトラクション「クリスタルドリーム」でした。そのテクノロジーに関心を示したマイケルは、クリスタルドリームのプロデューサーの井上省さんに会いたがりました。

すると、ハウステンボスからの連絡を受け、当時、NHKのディレクターだった井上さんが1993年1月1日、図面を携え、キャピトル東急に泊まっていたマイケルを訪ねてくれました。井上さんは、図面を広げて、マイケルにクリスタルドリームの仕組みを丁寧に説明してくれたのです。マイケルが喜んだのは言うまでもありません。

当時、マイケルはネバーランドに同じものを設置するために、クリスタルドリーム

に興味を持ったと報道されていましたが、実際は違います。「アメリカでは、100年前に『マジックビジョン』という仕組みが発明され、エプコット・センターのアトラクション『ユニシス』にも、それが使われている」「クリスタルドリームとユニシスは似ているけれど、何か違いがあるのかな」と、マイケルは言っていました。それを聞いて、私はマイケルの博識ぶりと好奇心の強さに、あらためて驚かされました。彼はあくまでも、「マジックビジョン」と「クリスタルドリーム」の違いがどこにあるのかを知りたかったのです。

彼は興味を覚えたり、疑問に思うことに遭遇すると、徹底的に研究します。それがいつかはステージや作品に反映されるのかもしれませんが、その時はただ、納得がいくまで知りたいだけなのです。彼がすごいのは、疑問があると、多忙なスケジュールをぬってでも、当事者に直接会いに行って尋ねるところです。

ネバーランドには、クリスタルドリームと同様のものはありませんが、マイケルはハウステンボスの博物館にあった、日本最古のアニメーションの機械に心を惹かれ、100万円近い費用をかけて同じものを作り、ネバーランドに送りました。

なお、マイケルが出発する際、ハウステンボスからオリジナルキャラクターのトレーナーがプレゼントされました。後日、マイケルのモスクワ公演の模様がテレビで流れた時、そのトレーナーを着ているマイケルが、テレビに映し出されたのです。それを見たハウステンボスのスタッフは、とても喜んだそうです。

ハウステンボスについてはもう一つ、報道されなかったことがあります。

マイケルは、「ヨーロッパに行けばどこでも見ることができる、ありふれた街並みを観るために、何故来園者が料金を払わなくてはいけないのか」と疑問に思いました。テーマパークならば、来園者が楽しく遊べるインタラクティブなエンタテイメントをもっと入れるべきだと考えたのです。マイケルは1996年に、ユニバーサル・スタジオなどを手がけていたテーマパーク・プロデュースのエキスパート、ランドマーク社と契約関係にありました。マイケルは、ランドマーク社と提携すればハウステンボスはより素晴らしいテーマパークになると考え、さっそくハウステンボスにランドマーク社を紹介しました。前にも書きましたが、マイケルには営業センスがあり、実行力があり、何事も迅速なのです。

マイケルのアドバイスにしたがい、ハウステンボスは視察団をアメリカに送り、私はマイケルの依頼で、視察団のエスコートを担当しました。視察団はランドマーク社のスタッフとともに、マイケルの提案にしたがって、カリフォルニアのディズニーランドとユニバーサル・スタジオ、ラスベガス、フロリダのディズニー・ワールド、エプコット・センターとMGMスタジオを見て回りました。

その後、マイケルはハウステンボスに提案書も出しましたが、視察から得た新しいエンタテイメントが取り入れられることはありませんでした。それもそのはず。ハウステンボスが送った視察団のメンバーは、銀行マンや建設会社などの出向役員で構成されており、アトラクションの担当者や直接お客さんに接するスタッフはもちろん、夢と感動のエンタテイメントが理解できる人など、一人も入っていなかったのです。「エンタテイメントに携わる者は、あらゆる知恵を絞ってお客さんを楽しませる努力をするべきだ」と力説したマイケルの言葉は届かず、マイケルの助言は水泡に帰してしまいました。

「ハロー、ディス　イズ　マイケル」

マイケルは、アメリカに帰っている間も、「ハロー、ディス　イズ　マイケル」と不意に電話をかけてきては、私たちを驚かせました。

用件はさまざまです。思いついたゲームやテーマパークのアイデアを伝えられたこともありますし、「マユミの家の、今日の晩ご飯のメニューは？」と訊かれたこともありました。幼い頃からショウビズの世界で生きてきたマイケルにとって、「普通の家庭」の生活は、非常に興味深かったようです。

また、セガの鈴木久司さんのご自宅や職場にも、ちょくちょく電話をしていたようです。電話口でマイケルは「今度はいつ来るの？　いろいろ会って話したいことがあるんだ」と言っていたとのこと。おそらく、部屋でゲームで遊んでいて、ふと思い出した時や淋しくなった時に、時差のことなどは考えもせずにかけてきたのでしょう。

キャピトル東急ホテルの鈴木成和さんのところにも、一度だけ、マイケルから電話がかかってきたそうです。

ホテルのオペレーターからあわてた様子で「マイケル・ジャクソンさんらしい方から お電話が入っています」との連絡が入り、鈴木さんが出てみると、電話の向こうで「ハーイ、スズキ」とマイケルの声。

「何の用事だろう」と不思議に思う鈴木さんに、マイケルは「ちょっと訊きたいことがあるんだけど……」と切り出しました。

「日本は昔、中国大陸とつながっていたの?」

「そうだね。たぶん、つながっていたんだと思う」

「じゃあ、日本を作ったのは誰?」

「天照大神(あまてらすおおみかみ)かなあ」

「ああ、そうなんだ。ありがとう、ありがとう」

そこで電話は切れてしまったのだそうです。

一体マイケルは、何を調べていたのでしょう。

ネバーランドを訪れる

＊　＊　＊

「リズが飾りつけをしてくれたんだ」

1993年1月、セガの鈴木久司さんと荷宮尚樹さん、そして私の3人は、マイケルが作ろうとしていたテーマパークの打ち合わせと、セガがマイケルにプレゼントした家庭用ゲーム機のセットアップのため、ネバーランドの彼の自宅を訪れました。

ネバーランドへの旅は、最初から、驚きに満ちていました。

まず、私たちが泊まっていたロサンゼルスのホテルに、出迎えのリムジンが差し向けられました。そのまま、マイケルの家までドライブかと思いきや、リムジンはサンタモニカ空港に向かい、そこにチャーターしたジェットヘリコプターが待っていたのです。

さらにヘリコプターはネバーランドにまっすぐ向かわず、マリブコースト（マリブ海岸）沿いを飛んでいきました。

上空から眺めるマリブコーストは、まさに絶景でした！　この景色を私たちに見せるために、マイケルはわざわざ遠回りをするよう、パイロットに指示を出していたのです。

私たちが美しい海岸を堪能しきった頃、ヘリコプターは大きく旋回し、ネバーランドに向かいました。

空港を出発して30分ほど経った頃、私たちを乗せたヘリコプターは、ネバーランドに到着しました。上空からはテーマパークや動物園、きれいに刈り込まれた芝の広い庭と、巨大な邸宅が見渡せました。

マイケルの邸宅の玄関を開けた私は、またしても度肝を抜かれました。すでに1月も半ばだというのに、邸内は、まばゆいばかりのクリスマスデコレーションで飾りたてられていたのです。階段の手すりには緑のツタが絡まり、赤いポインセチアがあちらこちらに置かれ、雪景色に彩られたフロアには、屋根に雪を載せた小さな電車が走

っていました。私は、クリスマス装飾品の専門店にいるような錯覚に陥りました。マイケルに「一体どうしたの？　もうクリスマスは終わったよ」と言うと、マイケルは「リズ（エリザベス・テーラー）が飾りつけをしてくれたんだ。だから、残してあるんだよ」と答えました。

次に私たちが案内されたのは、おもちゃの部屋でした。テニスコートほどの広さの部屋は、木製のおもちゃやぬいぐるみでいっぱいでした。意外にも、ガンダムや最新流行のおもちゃはなく、木製のピノキオやスノーホワイト人形など、ほとんどがクラシックなものでした。

「アップルサイダーだよ」

ダイニングルームには、寿司が用意されていました。日本からの来客のために、マイケルがロサンゼルスから寿司職人を呼んでいたのです。もっとも寿司職人は、日本人ではなく、ブロンドの髪に青い目の白人でした。

なお、家には大きなワインセラーがありました。マイケルはお酒を飲みませんが、

この家を購入した時に、ワインとセラーもついてきたそうです。
「飲み物はドン・ペリニョンほか、お好きなものをどうぞ」と勧められ、荷宮さんはすかさず「ドン・ペリをお願いします」と答えました。私は「初めての訪問なのに、遠慮という言葉を知らないの？　それも真っ昼間から。打ち合わせを控えているのに」と心の中で呟きながら彼をにらみつけたのですが、何の効果もありませんでした。
ふとマイケルを見ると、彼のグラスには荷宮さんのドン・ペリと同じ色の発泡飲料が注がれていました。私が驚いて「マイケル、あなた、いつからお酒を飲むようになったの？」と訊くと、彼はいたずらっぽく笑い、小声で私に「アップルサイダーだよ」と耳打ちしました。それは、客に遠慮させないための、マイケルの配慮だったのです。
そこで私もご相伴にあずかり、シャンペンと白人の寿司職人が握った寿司のコンビを味わいました。
ちなみにマイケルは、食事するところをほとんど見せません。この時も、私たちが寿司を食べている間、マイケル自身は「用事があるから」と席をはずし、食事が終わった頃に戻ってきては、チョコレートなど、お菓子ばかり食べていました。

何もかもが桁違い

打ち合わせの後、私たちはマイケルに、ネバーランドを案内してもらいました。そこはもともと、彼とポール・マッカートニーが、共作曲「Say Say Say」のビデオクリップの撮影に使った場所でした。ちょうどエンシノの家からの引っ越しを考えていたマイケルは、その土地がすっかり気に入ってしまい、1988年に1700万ドル（約17億円）で購入したのです。広さは2600エーカー（約11平方キロメートル、皇居の面積の約10倍）。建物は3棟ありました。

メインの建物は、地上3階とワインセラー用の地下1階からなり、1階はリビングとダイニングルーム、2階は寝室になっていました。また3階はエンタテイメントルームで、ここには市場に出ている、ありとあらゆる家庭用コンピューターゲームが揃っていました。

そして別の一棟には、これまたおびただしい数のアーケードゲームが置かれていました。荷宮さんによると、当時、ゲーム業界には「ネバーランドの居間には、『バー

チャファイター』などのアーケードゲームが置かれている」という噂が流れていたそうです。しかし実際には居間どころか、一つの建物がまるまる、「ゲームの館」と化していました。鈴木さんによると、マイケルは、セガがアーケードゲームの新機種を出すたびに、必ず1台は買ってくれたのだそうです。

数あるゲーム機の中でも、特に私たちの目をひいたのは、大きな出窓の前に置かれた「R360」でした。これは地球ゴマのようにグルグルと回る、当時のセガの最新機種でした。出窓のところに置いたのは、「中で回って遊んでいるのを、外にいる子どもたちにも見えるようにするため」であり、マイケルはそのために、家を改築したのだと言っていました。

「つらい思いをしている子どもたちを見ていられない」

広大な庭には、ラマやキリンをはじめ、さまざまな動物がいて、大きな観覧車やメリーゴーラウンドなどの遊園施設も整っていました。

なかでも圧巻だったのは、映画館です。コンパクトなミニシアターで、ステージや

客席、映写室は当然完備。ポップコーンやアイスクリーム、スムージーなどが用意されていて、マイケルや子どもたちがいつでもそれを食べられるよう、売店には常に、スタッフがつめていました。しかも上映されている映画は、その時期にロサンゼルスの映画館でかかっているのと同じもの。マイケルは、そのシアターで上映するために、新作映画の上映権を買っていたのです。
　さらに、チャイニーズシアターの脇に立っていたのと同じ、巨大なオスカー像までありました。荷宮さんが「これはどうしたの？」と尋ねると、マイケルは「買ったんだよ」と答えたそうです。
　マイケルは、映画や「映画館のスタイル」が大好きでした。しかし、街中の映画館に行けない以上、自宅の敷地内に作るしかなかったのでしょう。
　ビル・ブレイによると、マイケルは一度、ダイアナ・ロスに「周りはざわざわするかもしれないけど、好きな時に出かければいいじゃない」と言われたことがあるそうです。しかしマイケルはいつも、「自分が行くと大変なことになるし、怪我をする人が出るかもしれない」と、非常に気にしていました。
　また映写室の脇にはガラス張りの部屋があり、そこにはベッドと医療機器が置かれ

ていました。
マイケルは「メイク・ア・ウィッシュ　ファウンデーション」という基金をサポートしており、毎月、深刻な病気を患っている子どもたちをネバーランドに招待しては、遊園地やゲームで遊ばせていました。映画館にあったガラス張りの部屋は、ベッドから出られない子どもたちに、看護師立ち会いのもと、寝たままで映画が観られるようにするためのものだったのです！
感動する私たちに、マイケルは「僕がここまでこられたのは、ファンのみんなのおかげだし、自分が子ども時代につらい経験をしてきたから、つらい思いをしている子どもたちを見ていられない」と言っていました。

「僕は孤独だった」

後でビル・ブレイに聞いたところ、ネバーランドを維持するために、常時50人のスタッフが働いているとのことでした。広大な土地、施設、動物たちの食費、医療費、人件費……。娯楽機器はリースだったようですが、毎月どのくらいの費用がかかるの

か、見当もつきません。

このように、何から何まで桁違いだったネバーランドですが、そのスケールの大きさに反して、私は寂しさを感じずにはいられませんでした。何故なら、そこにはほとんど人影がなかったからです。

大きなおもちゃの部屋、アーケードのゲームセンター、映画館、どこも空っぽで、誰一人遊んでいる人がいなかったのです。

その空虚さを補うかのように、庭には遊んでいる子どもたちのブロンズ像が置かれていました。また、玄関ホールから続く廊下には、実物大のメイドや執事、カウボーイ、マジシャンなど、さまざまな像が置かれていました。

私は、マイケルの深い孤独を感じました。

確かにマイケルは、たくさんの子どもたちを家に招き、すべての施設を彼らが楽しめるように開放していました。

しかし彼らが帰り去った後は、広大な敷地の中で、また一人ぼっちになってしまう

のです。

「You Are My Life」の冒頭に出てくる「信じられるのは自分だけ。僕は孤独だった」という歌詞を聴くたびに、私の脳裏にはネバーランドの情景が浮かんできます。

スーパースターの葛藤

＊　＊　＊

マイケルの「結婚」

よく知られているように、普段は人一倍恥ずかしがりやのマイケルは、初対面の人、特に女性に会う時は、必ずサングラスをかけていました。

不思議なことに、彼は「サングラスをかけると、自分が透明人間になれた気がする」と言っていました。マイケルは、目の表情から心を読み取られることを恐れており、「目を隠すことで、心を隠すことができる」と考えていたのかもしれません。

そんなマイケルが結婚したと聞いた時は、本当に驚きました。

私は、エルビス・プレスリーの娘であり、マイケルの最初の妻でもあるリサ・マリーとは、会ったことがありません。

しかしビル・ブレイは最初から、彼女のことがとても気に入っていたらしく、よく「マイケルとリサは似た環境で育っている」「とてもいい子で、結婚するのはいいと思う」と言っていました。

一度、ニューヨークでマイケルと私たちがミーティングをしている最中に、リサから電話がかかってきたことがありました。

マイケルは「今、打ち合わせ中だから、1時間ほどしたら連絡するね」と答えたのですが、1時間後、マイケルからの連絡を待たずに、再びリサ・マリーから電話がかかってきました。

マイケルが多忙なため、彼とリサはあまり会っていなかったようですが、電話口から聞こえる彼女の声はとても優しく、マイケルのことをきちんと理解しているように思えました。この時私は、「マイケルが、同じように物静かな人と出会えて良かった」と心から思ったので、二人が離婚してしまった時は、とても残念な気持ちになりました。

なお、私は、後にマイケルの2番目の妻となったデビー・ロウとは、1987年の来日時に会っています。
彼女は当時、マイケルがかかっていた皮膚科の看護師でした。身長はマイケルと同じくらい。がっちりした体格で、どちらかといえば無愛想で、マイケルとは正反対のタイプだったため、「マイケルがデビーと結婚した」と聞いた時は、とても意外な感じがしました。

変装して、人ごみの中へ

これはビル・ブレイに聞いた話ですが、マイケルとビルは、よく連れ立ってニューヨークへ行きました。仕事の時はもちろん、プライベートでニューヨークの景色を楽しむ時も、マイケルはビルを車に押し込んだそうです。
ビルはマイケルに「車の窓を閉めて、街の人たちに気づかれないように」と注意し、マイケルはもちろん、「お父さん」にしたがうのでした。

マイケルは、自分が人目につかない状態で、ほかの人たちを観察することが大好きでした。そんな彼にとって、ビルとのニューヨーク探索は、人々の日常生活を目にする、絶好の機会だったのです。食料品店や劇場に出入りしたり、洗濯物を干したり、地下鉄の階段を駆け降りたり——。どれも、マイケルにはできない行動でした。

また、マイケルは時々、車の中ではなく、普通の人のように人ごみの中に入りたがりました。

そんな時、マイケルはメイクアップアーチストに、誰が見てもマイケルとわからないようなメイクをしてもらいました。

メイクを施したマイケルとビルは、誰にも気づかれずに、人通りが多い通りを歩きました。しかし不運にも、鋭いファンがビルに気づくことがあります。ファンはすぐに、ビルと一緒の人物が誰であるかを推定します。すぐさま黄色い声が渦を巻き、カメラのシャッターの嵐が訪れて、変装したマイケルの冒険は終わるのでした。

そんなマイケルにも、時には気心の知れた友人たちと、リラックスして過ごす時間

もありました。
マイケルとポール・マッカートニーが、ロサンゼルスで一緒に「The Girl Is Mine」のレコーディングをした時のこと。ポールとマイケルは1日休みを取って、ユニバーサル・スタジオに出かけたそうです。
ビルは、ユニバーサル・スタジオと交渉して、半日間、一般客を入れない貸切にしてもらいました。マイケルはビルに、ビルの友人の子どもたちを連れてくるよう頼み、ポールはロサンゼルスにいた彼の子どもたちを呼びました。
その日は、ユニバーサル・スタジオのトロリーに乗って映画やテレビのセットをたくさん見学しました。マイケルは映画のセットに感銘を受け、ガイドに、セットの歴史についての質問をし、たくさんの写真を撮りました。
それらを思い切り楽しんだ後には、ローラーコースターが待っていました。ビルが、ふと隣に座ったマイケルを見ると、その顔は、クリスマスの朝の子どものように、喜びに満ちていたそうです。

マイケルの受難

1993年9月の来日は、マイケルにとって、非常につらいものでした。直前に、少年への性的虐待疑惑が持ち上がったからです。
この年の公演は九州で行われ、私は最初の数日のアテンドを次原さんにお願いしていました。
次原さんによると、1992年の来日時にはマイケルを歓迎してくれていたお店や施設が、この時は手のひらを返したように冷たく、CNNをはじめとした、国内外のマスコミの追跡もすさまじかったそうです。

追いかけてくる報道陣を振り切って、やっとの思いでハウステンボス内のホテルに駆け込み、次原さんがマイケルを部屋まで送り届けて、廊下に出ようとすると——。
マイケルが、静かに歌を歌っていました。
それはあまりにも美しく、淋しく、涙を誘うような旋律でした。
次原さんが思わず「マイケル、それは何の歌？」と訊くと、彼は「風の歌だよ」と

だけ、答えたそうです。

さらにツアー中、マイケルのスタッフは全員電話を切り、外部との連絡用に、次原さんの電話だけを活かしておいたのですが、世界中のメディアやファンなどから、そこにジャンジャン電話がかかってきました。次原さんは「スーパースターって、いつもこういう状態なんだな」と思ったそうです。

また、ビル・ブレイの提案で、プレスを沈静化させるため、ロイターの記者を対象に、記者会見を行うことになり、次原さんがそこに出て行くことになりました。次原さんはビルに言われた通り、何を訊かれても「ノーコメントです」とだけ繰り返し、何とかその場をしのいだそうです。

越えられなかった人種の壁

何度か書いてきたように、誰に対しても決して偉ぶることがなく、相手によって態

度を変えることもないマイケルですが、地位ある人からの招待は嬉しかったようです。1987年の来日の際には、大阪市長から市庁舎へ招待され、非常に喜んでいました。

また、1992年の来日時には、アメリカ大使館に招かれました。その際私は、マイケル・アマコスト大使と、奥様であるバーニーさんからの依頼でパーティーを企画し、日本に滞在している、200人以上の米国企業の方々を招待しました。その席上で、ペプシコ社社長からマイケルの「Heal The World基金」への、寄付金の贈呈式も行われました。マイケルはたくさんのサインや写真の依頼に、丁寧に対応していました。

意外に思われるかもしれませんが、マイケルには「自分が認められること」に対する、強い欲求がありました。そしてそれは、「自分は黒人だから、正当な評価がもらえないのではないだろうか」というコンプレックスと、深く関わっていたのです。

アメリカでは、白人と有色人種の間には越えられない壁があります。この壁は、日本の人々が想像するより、はるかに高く強固です。

アメリカでは子どもの時から平等意識を育てます。小学校のカフェテリアのメニューにまで「人種、性別、年齢、出身、障害、財産、その他あらゆる要素で差別されたと感じたら、黙っていてはいけません。ここに手紙を書いて知らせてください」と書かれるほど、徹底しています。そうしなければならないほど、アメリカの差別問題の根は深いのです。

聡明で、誰よりも物事に敏感なマイケルは、子どもの頃から、黒人であることがアメリカ社会で成功するうえで有利にはならないと、身をもって感じていたのでしょう。音楽制作や公演における、出演者を除いたスタッフは、全員白人または白人系でした。

マイケルは、白人以外の人種としては前人未踏の記録を作りました。国境、人種、宗教といった、あらゆるバリアを破って、世界の人々の心をつかんだのです。アメリカは世界の警察官になろうとして、結果的にテロを招き、世界中に戦火を広げましたが、大国アメリカが成し得なかったことを、マイケルは一人で達成したのです。

それなのにマイケルは、母国アメリカで、白人であるプレスリーの人気を凌駕する

ことができませんでした。アメリカでは、「マイケル・ジャクソンが白人だったらプレスリーを超えただろう」と思っている人がたくさんいます。

前にも書いたように、マイケルは白人の、それも、彼がその存在を超えようと願ったプレスリーの娘、リサ・マリーと結婚しました。あまり表沙汰にはなっていませんが、ビルによると、結婚を発表したマイケルのもとには、「殺してやる！」と書かれた脅迫まがいの手紙が殺到したそうです。

２００９年１月、黒人の血をひくバラク・オバマが大統領に就任したことは、アメリカ史に永遠に残るほどの出来事です。ようやく、アメリカが真の意味で誰にでも開かれた国になろうとしている時に、マイケルは逝ってしまいました。

マイケルの心のうちは、今となっては誰にもわかりません。しかし、アメリカという強大な国が彼を生み、その母国アメリカが、彼を果てしない暗い苦悩の世界に追い込んだのは確かです。

演技への思い

1980年、マイケルはロサンゼルスのプレスパーティーで、ジェーン・フォンダと出会いました。

もともとマイケルは、エリザベス・テーラー、ダイアナ・ロスなど、芯が強い女性に憧れていました。マイケルは昔から、父親の浮気に心を痛めており、母親のためにラスベガスに家を購入したこともあります。マイケルは、母親が父親と別れて暮らすことを望んだのですが、結局母親は夫の元に帰っていきました。マイケルの母親は、夫と別れて一人で生きられるほど強くはなかったのです。

ジェーン・フォンダは、母親にはない強さを持った女性で、マイケルは彼女に憧憬の念を持ちました。ジェーンに誘われ、東海岸のニュー・イングランドにある彼女の別荘を訪ねたマイケルは、そこで、ジェーンの父親、ヘンリー・フォンダとキャサリン・ヘプバーンに会いました。二人とも往年のアメリカ映画の大スターです。

マイケルはすぐに彼らと打ち解け、映画の話で盛り上がりました。その時、ジェーンがマイケルに「あなたにはピーター・パンの役がぴったりよね」と言ったので、マ

イケルは、「僕がピーター・パンが好きなことを、何故ジェーンが知っているのだろうか」と驚いたそうです。

それ以来、マイケルは、音楽以上に演技に興味を持つようになりました。

彼はもともと映画が好きで、プロモーションビデオのことを「ショートフィルム」と呼んでいましたし、映画「THE WIZ」に出演した時も、あまりの楽しさに、自分に向いていると思ったようです。

ビル・ブレイによると、「THE WIZ」の撮影時、マイケルはすべての役のセリフを暗記しており、セリフを間違えることは一切なかったそうです。

1982年、マイケルは、映画「E.T.」のナレーション入りのアルバムの制作に参加し、それが縁でスティーブン・スピルバーグと仲良くなりました。スピルバーグはマイケルに「もしE.T.がエリオットのところに行かなかったら、きっと君の家に行ったに違いないよ。無垢(むく)で優しいからね」と言ったそうです。

数年後、「ピーター・パン」の物語をモチーフにした映画「Hook」の制作を考えて

いたスピルバーグは、マイケルに出演をもちかけました。さらに彼は、ロンドンで「BAD」ツアー中のマイケルを訪ね、突っ込んだ話し合いが行われました。マイケルは自分がピーター・パン役を演じることができると信じ、映画への進出を目指して音楽から撤退する決心をしました。

しかし、「Hook」に登場するのは、「40歳になり、弁護士をしている」ピーター・パンでした。そしてスピルバーグは、ピーター・パン役にロビン・ウィリアムズを選んだのです。マイケルは映画ビジネスに進むために別の道を模索しましたが、結局は成功しませんでした。こうしてマイケルは、音楽の世界に戻ったのです。

怒りをあらわにしたマイケル

この本では、マイケルの生の声をできるだけ多く紹介したいのですが、あいにく彼は寡黙で、ほとんど必要最小限のことしか話しませんでした。おしゃべりでストレスを発散することがなかったマイケルは、歌詞や歌声に、自分の気持ちを込めていたの

かもしれません。

なかでも1995年6月に発表された「HIStory」は、彼自身の主張が強く反映されたアルバムだと言われていますが、1996年4月にシングルカットされた「They Don't Care About Us」は、「歌詞の一部が反ユダヤ的である」と批判を浴びて大騒動を引き起こし、シングル盤の問題の箇所にはノイズが入れられ、その後、歌詞自体が変更されることになりました。

ビル・ブレイによると、レコーディング中から、マイケルの周囲の人々は心配したそうです。アメリカの音楽界やマスメディアは、実質的にユダヤ系の人々が牛耳(ぎゅうじ)っており、彼らを怒らせたら音楽活動に支障をきたすことは必至です。しかし、誰もマイケルにそれを言い出せませんでした。マイケルは偉大になりすぎていたのです。周囲はいつしかイエスマンで固められ、マイケルに耳の痛いことを言える人がいなくなっていました。

制作スタッフから頼まれたビルはマイケルに忠告しましたが、ビルの話にはいつも

耳を傾けるマイケルも、この時だけは頑として「ユダヤ人を侮蔑しているのではなく、社会の人種差別について歌っているんだ」と主張し、譲らなかったそうです。

「They Don't Care About Us」は、発売後すぐに物議を醸し、マイケルはたびたび記者会見を開いて釈明することになりました。1996年6月15日付の「ニューヨーク・タイムズ」ではこの問題を取り上げ、マイケルの釈明を掲載しています。その内容は、以下のようなものでした。

「この歌詞が人々を不快にさせるという意見は誤解に満ちており、非常に僕を傷つけています。確かにこの歌は偏見と憎しみによる痛みを歌ったものです。それは、社会や政治の問題に注意を向けてもらうための、一つの手段なのです。僕は非難される者、攻撃される者の代表です。僕はあらゆる人間の代表なのです。スキンヘッドであり、ユダヤ人であり、黒人であり、白人でもあります。僕は誰かを攻撃したいわけではありません。若者たちへの不当な仕打ちについて、誤って彼らを非難することになりかねない世のシステムについて歌っているのです。僕はそれに怒っているのです。その怒りが、間違って解釈されているのではないかと思います」

「They Don't Care About Us」が作られたのは、マイケルが13歳の少年の父親から児童への性的虐待疑惑で訴えられ、多額の示談金で和解（1994年1月）した直後です。今でこそ、世界中の人がこの事件および2005年に起きた裁判についての彼の潔白を知っています。しかし、当時は世界中のマスメディアが彼を犯罪者のように糾弾し、マイケルの無実を信じるファンを除き、社会全体がマイケル・バッシングに揺れていました。

マイケルは「反ユダヤを歌ったものではない」と主張しました。でも、何度聴いても、この歌詞からは、事件をでっち上げた少年の父親とその一派に向けた憤りが伝わってきます。

少年の父親は、ユダヤ系でした。

また、「They Don't Care About Us」が収録されたアルバム「HIStory」には、もう一つ気になる曲があります。「D.S.」です。これは、歌詞に登場する検事、ドム・シェルダンのイニシャルですが、上記の事件を立件しようとしたカリフォルニア州の検

事、トム・スネドンを暗示しているのは明らかです。マイケルはこの歌で、「俺をとっつかまえたいD.S.。あいつは冷酷な検事。票が欲しいだけのやつで、言っていることの半分もやりはしないさ」と痛烈に皮肉っています。

温厚で穏やかなマイケルからは想像できない、激しい怒りが伝わってくるこれらの歌を聴くたびに、私は胸がしめつけられます。マイケルはたった一人で、どれほど苦しんだのでしょう。それでも事件のさなか、マイケルは告発側の少年を一度も非難しませんでした。

なお「They Don't Care About Us」は、ラジオでの放送が自粛されたアメリカでは、ビルボードＨＯＴ１００の30位にとどまりましたが、ドイツとイタリアでは首位を獲得しました。またアメリカで放送自粛などのバッシングを受けた同曲を収録したアルバム「HIStory」は、世界で２０００万枚を売り上げ、２枚組アルバムの売上げとして世界最高記録を樹立しました。アメリカのマスメディアによる妨害ともいえる自粛規制運動にもかかわらず、世界のファンはマイケルを支持したのです。

「みんなが僕を利用する」――中谷学さんの体験

マイケルは1996年3月、サウジアラビアのアル・ワリード・ビン・タラール王子との事業提携を開始しました。しかし、その事業も、あまりうまくはいっていなかったようです。

セガの中谷学(がく)さんは、当時パリにいたマイケルとのプロジェクトのためにフランスに飛び、件の事業提携発表後のマイケルと仕事をすることになりました。

以下は、その中谷さんから聞いた話です。

パリで、セガのゲーム「スペースチャンネル5　パート2」に使う、マイケルのダンスを撮影していた時のこと。

休憩時間中に、中谷さんたちと立ち話をしていたマイケルが、ふと中谷さんの友人の靴を見て、「いい靴だね」と褒めました。中谷さんいわく、マイケルは珍しい靴を見ると、いつも褒めていたそうです。

そこで中谷さんが何気なく「マイケルは、自分で靴を買いに行くの?」と尋ねたと

ころ、マイケルの目がみるみる潤み、涙がこぼれ落ちそうになりました。そして彼は「どうやって？　どうやって僕がショッピングをできると思うの？」と言ったのです。

マイケルが涙を流して泣き出すのではないかとうろたえた中谷さんが、「あっ、ごめんなさい。誰かほかの人があなたの靴を買ってくれるんですね」と言うと、マイケルは「それしかできないんだ」と答えたそうです。

また、マイケルのかかりつけの医者が中谷さんに「マイケルが親知らずを抜いたばかりなので、撮影を中止してほしい」「マイケルは週に2、3本のコンサートをこなしていて、疲れている」と言ったこともありました。中谷さんたちは、撮影スケジュールを確保するために、すでに4日ほど待っていたので、収録時間を半減することで、何とか折り合いをつけてもらったそうです。

撮影当日、誰もマイケルがスタジオに来ることを知らないはずなのに、外ではたくさんのファンが彼を待っていました。やがて車が2台到着しました。どちらにもマイ

ケルは乗っておらず、いぶかしく思っていると、彼は、まるでファンから隠れるかのように、後ろのトランク用のドアから出てきたのでした。

その後、マイケルと中谷さんは、スケジュールを確認するために、二人だけで会議室に入りました。

するとマイケルが開口一番、「みんなが僕を利用する。僕を機械のように利用する。僕がどんな気持ちか誰もわかってくれない」と言ったのです。マイケルは疲れきっているようでした。

そんなマイケルの姿を見るのがあまりにもつらく、中谷さんが「あなたがどうしても嫌なら、無理に撮影しなくてもいいですよ」と気遣うと、マイケルは少しの間考え込んでいました。しかし中谷さんは、「僕もマイケルを利用しているのではないか」と後ろめたく思いながらも、「でも、子どもたちは、このゲームが大好きだと思います」と言いました。するとマイケルは、「ＯＫ」と答えたそうです。

なおその会議室は、車が2台入るガレージよりも少し狭いくらいでした。中谷さんは、部屋の真ん中に小さなテーブルと椅子を4脚置いていたのですが、部屋に入った

マイケルはテーブル際の椅子には座らず、部屋の隅に置かれていた予備用の椅子に座ったのです。

やや気まずい雰囲気でしたが、マイケルが座った場所は、打ち合わせを行うには暗すぎたので、中谷さんは明るいテーブル際の椅子に座りました。コミュニケーションがとりにくいので、結局マイケルは、中谷さんの向かい側の椅子に座ったそうです。

そして撮影が始まりました。中谷さんは「次は、このダンスをしてほしい」と、マイケルに説明するため、マイケルのコンサート映像を持ってきていたのですが、いざ映像を流すと、マイケルはダンスを中断し、「ビデオに映っている自分を見たくない」と言ったそうです。困った中谷さんが「でも僕は、あなたのダンスの動きの呼び方を知らないし」と言うと、マイケルは「あなたがビデオを見て、僕に踊ってみせてくればいいよ」と答えました。

マイケルは、自分の映像を見るよりも、中谷さんのダンスを見て、次に自分がするべき動きを推測するやり方を望んだのです。

「前もってわかっていたら、練習してきたのに」と思いながらも、中谷さんは、マイケルのコンサート映像を見ながら、懸命に踊りました。いくつかのシンプルな動きは何とか伝わり、ムーンウォークも、後ろに歩いただけで、マイケルは理解してくれました。しかし、ほかの動きはとうてい再現不可能だったため、結局マイケルはあきらめて、自分のコンサート映像を見ることにしたそうです。

私は、ファンから隠れるように車を降りるマイケルを見たことがありません。「自分は利用されている」などといった愚痴を、マイケルから聞いたこともありません。そして私が知っているマイケルは、打ち合わせではいつも、一番コミュニケーションがとりやすい場所に率先して座る人でした。

全身全霊を込めて立ち上げたジョイントベンチャーが暗礁に乗り上げるなど、パリでのマイケルは心身ともに疲れきっていたようです。中谷さんは、普段は見られないマイケルに出会ったのでした。

それにしても、マイケルの前でダンスをするのは、さぞ勇気がいったに違いありません。

親子のようだったマイケルとビル・ブレイ

＊　＊　＊

マイケルとビルとの出会い

これまでにも幾度となく触れてきましたが、マイケルと私の交流について語るうえで欠かせない存在が、ビル・ブレイです。

ビルはセキュリティのチーフとして、30年にわたりマイケルを支え、守り続けてきました。おそらくマイケルのためだけを考えて働いていた唯一の人物で、マイケルが誰よりも信頼していた父親のような存在でした。

ビルは、マイケルがジャクソン5として活動していた11歳の時から、セキュリティを担当していました。２０００年に引退し、その6年後に80歳で亡くなりましたが、もしビルがついていていたら、マイケルの悲劇は起こらなかったのではないかと思わずにはいられません。

モータウン・レコードの社長、ベリー・ゴーディ・ジュニアとスタッフは、マイケルと彼の家族がインディアナ州ゲーリーからロサンゼルスに移り住むにあたり、若い少年たちの安全のために、彼らが公衆の中に出る時は常にセキュリティスタッフをつけることにしました。すぐに彼らの頭に浮かんだ人物が、当時ロサンゼルス市警の警察官だった、ビル・ブレイでした。彼はそれまでも、ゴーディの依頼で、さまざまなセキュリティ業務を行っていました。

ビルはモータウンから正式に依頼され、ロサンゼルス市警に籍を置きながら、ジャクソン・ブラザーズ全員のセキュリティのヘッドになったのです。

ビルは1926年に生まれ、ロサンゼルスで育ちました。母親、弟のガイ、妹のミルドレッドの4人家族です。

ビルが警察官になったのは、第二次世界大戦後のことでした。兵役から戻ったものの、妻を養おうにも仕事がなかったビルに、友人が「ロサンゼルス市警はどうだ?」と勧めてくれたのです。当時のロサンゼルス市警の待遇は、若い妻帯者には魅力的でした。ビルは、退職するまで29年、ロサンゼルス市警に留まりました。市警での最終

的な所属部署は窃盗・殺人課でした。
ロサンゼルス市警の仕事と、ジャクソン・ブラザーズのセキュリティの仕事を両立させるために、ビルはできるかぎりスケジュールを調整しました。彼は兄弟たちのコンサートについて各地を回り、テレビやラジオへの出演、スタジオでのレコーディングにも付き添いました。ビルは彼らにとって、保護者であり、相談相手であり、信頼できる人物であり、そして遊び相手でもあったのです。

ビルは特に、公演後に押しかける女性ファンの整理にあたりました。彼女たちは、才能あふれる若き人気スターを一目見ようとホテルのロビーや外に群がり、さまざまな思考をめぐらせて兄弟たちに近づこうとし、あわよくば話をしようと部屋にまで入ってきました。

コンサートの後、ビルにはほとんど眠る時間がありませんでした。ホテルの中を隅々まで見て回り、兄弟たちの部屋の鍵がロックされているかどうかを点検しなければならなかったからです。そして朝になると、ビルは再び兄弟たちの部屋を見回り、彼らが朝食をとったかどうかを確かめ、次の公演地へ向かう準備を手伝いました。

エンシノにて撮影
ビルの胸には、マイケルからプレゼントされたタランチュラ

ツアーライフは、とにかく大忙しでした。兄弟たちとビルはさまざまな町をめぐりましたが、家庭教師との勉強と公演に追われ、兄弟には観光する機会も遊ぶ時間もほとんどなく、せいぜいビルと枕の投げ合いをする程度でした。

しかし、兄弟たちを守る仕事は、ビルにとってはうってつけでした。公演先のホテルとレコーディングスタジオで過ごす日々は、厳しいものでしたが、反面わくわくするものでもありました。

兄弟たちは成長すると、女の子に興味を示すようになりました。そのうち、ステージで歌いながら好みの女の子を探すまでにエスカレートし、公演終了後には、ビルに「2列目のブルーの服を着た子を見た？　彼女は今夜僕に会いに来るんだ」などと言って、大笑いしていたそうです。

ビルと5人の兄弟たちの親密な関係は、1979年、マイケルがソロで制作したアルバム「Off the Wall」が発売されるまで続きました。

ビル、マイケル専属のセキュリティに

1979年のある日、マイケルはビル・ブレイに「自分専属のセキュリティスタッフになってくれないか」と相談し、ビルはすぐに了承しました。
その頃、マイケルとビルは親子のような関係になっていました。マイケルはビルを父親のように慕い、ビルはマイケルを息子のように愛していたのです。マイケルがビルなしで公衆の中にいたことはなく、必ずビルがマイケルの傍らについていました。

マイケルの父親、ジョセフ（ジョー）は、厳しい人だそうです。
私の知人の日本人記者が、マイケルの母親、キャサリンの自宅で彼女を取材していた時、たまたまジョーが部屋に入ってきました。キャサリンの写真を撮っていたカメラマンは、ジョーが醸し出す雰囲気に、恐怖を覚えたそうです。ジョーには、他人を威圧するオーラがありました。
ビルは、ジョーとは真逆のタイプの、温厚で優しい人でした。マイケルをかばってジョーとやりあったことも、1度や2度ではなかったそうです。

マイケルが幼い頃から一緒だった、二人の関係は、非常に深いものだったのです。
ビルは、まるで母鶏のように、マイケルの身の周りの安全を気にかけました。
マイケルが無鉄砲なことをすると、ビルは心配して彼を叱りました。
マイケルがロサンゼルス市内にアパートを借りた時は、ビルはマイケルのためにシーツやバスタオル類を買い揃え、マイケルの私服も、ビルが買いにいっていました。
また、マイケルがエンシノに住んでいた頃は、毎朝ビルがマイケルを起こしていました。
車を運転してマイケルを次の仕事場まで連れていき、レコーディング・スタジオでは飽きるほど長い時間を座って過ごし、休憩時間や終了後には、マイケルがきちんと食事をとったかどうかを確かめ、マイケルが床に就くまで一緒にいたのです。
マイケルの仕事が入っていない時も、ビルは毎朝マイケルのアパートに行き、マイケルが動物と遊ぶ時も、泳いでいる時も、自宅のスタジオで仕事をしている時も、常に一緒にいました。

前にも書きましたが、食が細いマイケルの心配をするのも、ビルの役目でした。彼は、特にマイケルの食欲がなさそうだと思った時は、唯一の手料理を披露していました。

マイケルたちがキャピトル東急ホテルに泊まっていた時のことです。ビルが「マユミに、とっておきの料理を教えてあげるよ」と言うので、私は厨房へついていきました。彼が「マイケルはこれが好きなんだ」「これを食べると元気になるんだ」「栄養があるんだよ」などと言うので、「どんなすごい料理ができるんだろう」と思っていたら、なんと、玉ねぎをそのまま、やわらかくなるまでオーブンで焼くだけだったのです！しかし実際に皮を剝いて食べてみると、確かにそれは甘く、とてもおいしく感じられました。

なお、ビルの左手の小指には3カラットのダイヤのリングが光っていました。後で知ったことですが、そのリングは、ビルがマイケルと仕事をするようになって25年目に、記念としてマイケルからプレゼントされたものだそうです。

いつもふざけあっていた、マイケルとビル

ビル・ブレイとマイケルは、互いにからかいあうことが好きでした。

ビルは、頭の形が良くないのを気にして、いつも帽子をかぶっていました。いたずらっ子、マイケルが、その帽子の下に、皮膚が痒（かゆ）くなる粉を入れたこともあったそうです。

また、マイケルはよく帽子をとりあげては、ビルの頭を軽く叩き、「ゴム頭」と呼んでいました。ビルはどこにでもいる父親のように、愛情ある眼差しをマイケルに向けて、「やめろ！　ジョーカー」と叫んでいました。

ビルの声は、マイケルの話し声の10倍くらいの大きさでした。警察官時代に射撃訓練で、耳を傷めており、耳が遠かったのです。マイケルは補聴器を使うよう、何度も勧めたのですが、ビルはかたくなに拒み続けました。ビルにはそんな、頑固な一面もあったのです。

ささやくようなマイケルの声と、ライオンの雄叫（おたけ）びのようなビルの声で繰り広げら

れる会話は、傍らで聞いていた私たちをも楽しませてくれました。

また、マイケルは、わざと小声でビルに質問をしては、ビルがトンチンカンな答えをするのを面白がっていました。

ビルは、マイケルが言ったことをかろうじて聞き取れると、マイケルと一緒に笑っていました。しかし、時にそれは、マイケルをあえて笑わせようとしているようにも見えたものでした。

マイケルが成長し、ビルが年をとるにつれ、二人の関係は変わっていきました。多くの父と子がそうであるように、「息子」であるマイケルが、年老いていく「父」であるビルを心配するようになったのです。やがてビルは、マイケルと旅をしてもホテルに残り、ビルのアシスタントがマイケルに付き添うようになりました。

ビルが75歳になった時、マイケルはビルにオフィスをたたむように頼みました。その頃、マイケルは、一年のほとんどを海外で過ごしていたからです。また当時、財政難に陥っていたマイケルにとって、セキュリティオフィスの経費は、負担が重かった

のでしょう。
ビルがリタイアする際、マイケルはビルに、メルセデス・ベンツの高価な車をプレゼントしました。車高が低く、大柄なビルには運転しづらそうでしたが、それでも彼は嬉しそうに乗っていました。
さらに、マイケルは生涯、ビルの生活の面倒をみると約束し、ビルが亡くなるまで給料を払い続けたそうです。
やがて、年齢とともにビルの健康は衰え、マイケルと一緒に旅をすることができなくなり、ついには重い病気にかかって外出もできなくなりました。
ビルがこの世を去ったのは、２００６年11月14日でした。

Memories

of

Michael Jackson

あとがき

＊　＊　＊

２０１０年3月のある日。
故郷のカリフォルニアに滞在していた私は、たまたまテレビを観ていました。すると、ＡＢＣテレビの「グッド・モーニング・アメリカ」で、マイケル・ジャクソンの元セキュリティスタッフ３人のインタビューが放送されていました。
彼らは最後の2年間、マイケルをガードしていたそうです。訪問者だけでなく、マイケルへのEメール、郵便物、電話のすべてを、まずは彼らが門番として受けていたのでした。郵便物の多くは弁護士からの、何百万ドルにものぼる高額な債務の請求書でした。マイケルは何度も訴えられ、いつも示談を選択していたのです。
また、薬物に関する質問に対し、彼らは「マイケルには薬物の問題はなかった」と答えていました。彼らは、マイケルの死は一人の人間によって引き起こされたものではないと思っているようでした。マイケルの追悼式に集まったたくさんの有名人やス

ターを見て、セキュリティスタッフたちは「その人たちは、マイケルの人生のどこにいたのだろうか?」と不思議に思ったそうです。マイケルはいつも一人ぼっちだったのに、彼らはどこにいたのか、と。

そしてセキュリティスタッフたちは、「マイケルの子どもたちは、彼のすべてだった」「子どもたちにとっては、マイケルがすべてだった」とも語っていました。それを聞いて、私は思いました。「マイケルは、望んで彼らをおいていったのではない」と。

ほかにも、マイケルの真実の姿を伝える番組がいくつも放送されて、私は嬉しくなりました。彼は、人間はもちろん、動物にも地球にも優しく、被害者にはなっても、決して誰かを傷つける人ではありませんでした。

この本では、そんな彼から学んだことをできるだけ紹介したいと思っていたのですが、まだまだ書ききれなかったことがたくさんあります。

マイケルは、さまざまな価値ある活動に人々の注意を向けさせたり、資金を集めたりするための努力を怠りませんでした。総額3億ドルを超える寄付を行ったほか、多

くの病院を実際に訪問し、ベッドを寄付し、末期的疾患の子どもたちを自宅に招き、孤児たちに家を提供したのです。

そんなマイケルを見習って、私も、ささやかではありますが、みなさんが買ってくださったこの本の印税を、私が理事として参加している、有森裕子さんが主宰する非営利団体「ハート・オブ・ゴールド」（アンコールワット国際ハーフマラソンを通じてカンボジアを支援する活動）と、「Tokyo English Life Line」（日本で暮らす外国人のための、英語によるカウンセリング・支援活動）に使わせていただきたいと思っています。

キャピトル東急ホテルの駐車場で、空港に向かうマイケルを鈴木成和さんと一緒に見送った日の光景が、20年以上経った今でも、昨日のことのように思い出されます。

ホテルの外は、マイケルを一目見ようと待っている、たくさんの人々でごったがえしていました。マイケルはセキュリティスタッフに囲まれ、押し込まれるようにしてバンに乗りました。全員が乗り終わるやいなや、バンと数台の車が発進していきました。鈴木さんと私は顔を見合わせ、マイケルが滞在したこの数週間が何事もなく過ぎ

たことに感謝し、互いに胸をなでおろしました。
私たちがエレベーターに戻ろうとした、その時。バンが引き返してきて、ドアが開きました！　そして、マイケルがバンから出てきて私たちの前に立ち、「Thank you for everything」と言いながら私たちをハグすると、再びサッとバンに飛び乗ったのです。私たちは、呆然と立ちすくんでいました。私は心の中で呟きました。「いいえ、マイケル。こちらこそ、THANK YOU for everything……」と。

マイケルのおかげで、私は素晴らしい方々にお会いすることができました。
ディズニーランドの日本への誘致交渉と開園後の東京ディズニーランドの総指揮にあたられた上澤昇さん。セガで、最高度なエンタテイメントのテクロジーを取り入れてゲーム開発をする環境を整えられた鈴木久司さん。ほか、数多くの方々です。

それから、この本を完成させるために協力をしてくださったすべてのみなさんに、心からの感謝をおくります。

先ごろ扶桑社役員を引退された平田静子さん。私は1987年に、平田さんから「ビル・ブレイに、マイケルについての本を書いてもらえないかしら」と打診されました。しかしビルは「アメリカの出版社からも100万ドルでオファーがあったが、受けなかった」と断りました。「マイケルはプライバシーが守れる生活を望んでいるし、自分もそれを守りたい」というのが、その理由でした。彼女は、この時のことをまだ覚えていて、23年後、私に本の執筆をオファーしたのです。

奥村傳さん(ポプラ社専務取締役で編集局長)は、マイケル・ジャクソンについて書かれた本は数多(あまた)あるが、私がマイケルに関わっていた10年間のパーソナルな回顧録を書けばいい、と励ましてくれました。

彼の計らいで、とても協力的な編集部員の佐藤正海さんが、この本を担当してくれました。彼は、本の方向性を決め、焦点を定めるうえで終始私を助けてくれ、私の記憶に基づいて当時の関係者に連絡をとり、私と彼らが会える手はずを整えてくれました。さらに彼は、私に「マイケルの絵を描いてみては?」と勧めてくれたのです。最初は戸惑いましたが、チャレンジして4枚描いてみました。

佐藤さんの計らいで、ライター&エディターの村本篤信さんが、関係者の皆さんへのインタビューを見事にまとめ、日本語に不安のある私をサポートしてくれました。私は、英語で書くほうが楽なので、私が書いた文章の翻訳や、マイケルに関わる出来事や年代などの詳細なリサーチを、長年の友人である井上美智子さんに頼みました。

セガの山崎律子さんは、マイケルが会ったセガのみなさん、特にすでにセガを離れてしまった方々を探し出すうえで、私を助けてくれました。また山崎さんは、当時のマイケルの古い写真ファイルを掘り出してくれました。

最後に、とても重要なことですが、私の夫、ジャックに感謝します。彼は私に、「マイケルズ・ペッツ」のプロジェクトのために働く機会をくれ、2000万円の損失を「これは節税プロジェクトだ」と言って不問に付してくれました。大きな声では言えませんが、私がこの25年間に彼の会社の「節税」に貢献したのは、このプロジェクトだけではなく、ほかにいくつもありました。

この本の完成にあたり、私は自分自身に問うています。「私は、あなたから学んだことを、ちゃんと実践した？」と。私は、そうできたと信じているし、あなたも同意してくれることを望んでいます。私は、私のリサーチをして、何か新しいことを提案し、マイケルファンのみなさんに楽しんでもらえるようにベストを尽くした、と。

それでは最後に、マイケルとビルにまつわる楽しいエピソードを紹介して、お別れしましょう。

ある時、マイケルとバブルスが、ビルと私の前を歩いていました。それを見て、ビルが笑って言いました。「彼らは親子みたいだ。ふたりとも手が長い。ハハハハハ……」。

またある時、マイケルが私に尋ねました。「ビルが、何故いつも帽子をかぶっているか知っている？」。私が「どうして？」と訊くと、マイケルはビルの帽子を取り上げ、平らにした彼の手をビルの頭にのせて言いました。「彼の頭は、ヘリポートみたいに

平らなんだ」。

そして彼は、いつものように口を手で覆って、「クックッ」と笑ったのでした。

本書は書き下ろしです。

マイケル・ジャクソンの思い出

2010年5月14日　第1刷発行
2010年6月 8 日　第3刷発行

著者　坂崎ニーナ眞由美

発行者　坂井宏先

編集　佐藤正海

ブックデザイン　文平銀座（寄藤文平・北谷彩夏）

構成　村本篤信

出版プロデュース　平田静子

編集協力　井上美智子

発行所　株式会社ポプラ社

〒160-8565 東京都新宿区大京町22-1

電話　03-3357-2212（営業）03-3357-2305（編集）

0120-666-553（お客様相談室）

ファックス　03-3359-2359（ご注文）

振替　00140-3-149271

一般書編集局ホームページ　http://www.poplarbeech.com

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

N.D.C. 914　206ページ　19cm　ISBN978-4-591-11810-8

著者経歴

坂崎ニーナ眞由美

1947年、山口県生まれの日系アメリカ人3世。アメリカで教育を受ける。サクラメント州立大学卒業。結婚後、1973年日本に帰る。JSMコンサルテイング（株）の経営者としてインターナショナルな事業に従事。30年に亘るライセンス・ビジネスでは、マイケルズ ペット、I ♥ NY、アメリカの画家スチュワート・マスコウィッツを日本に紹介。家庭教育の子育てコンサルタント第一人者、ドロシー・ロー・ノルト博士の代理人として博士の代表作「子どもが育つ魔法の言葉」を世に送りだした。

その他著書

「外国人との仕事がGood Jobになるとっておきの作法」PHP研究所、「いちばんたいせつなこと」PHP研究所